

「資本主義」論

阿 部 弘

目次

1 「資本」	ツカレイ
(1) "capital" の原初形態	[2] キリスト教の「倫理」
[1] 統治者の支配下にある資産総体	[3] 「国民経済」と「資本主義」
[2] 個人的資産	2) 機械制大工業による富形成システムと
[3] "Live Stock"	[1] 「産業資本主義」
(2) 利益と「資本」	[2] ドイツでの「資本主義」
[1] 「現在あるもの」を将来の資産と見	a) "capital"に対するラウの解釈
なす考え	b) カール・ビュッヒャーの迷い
[2] 資産の源泉としての貨幣=資本	[3] ロシアでの「資本・資本家的生産」
[3] "capital"="stoff"の考え方	概念
(3) 賃労働と「資本」	3) 「経済体制」としての「資本主義」
1) 「工業」と労働者	[1] ベーム・バウエルクの懐疑
[1] 「機械制大工業」と労働者の運命	[2] シュンペーターの動揺
[2] 「救貧法」と労働者階級の形成	[3] ゾンバルトの定義付け
[3] 労働者階級と資本家階級の闘争の開始	3) 体制イデオロギーとしての「資本主義」
2) マルクスによる同時代の社会の「富」	1) 「社会主義」への階梯としての「資本主義」
規定の変化	[1] プレハノフの問題提起
[1] 『経済学批判』と『資本論』	[2] ルクセンブルグやレーニンの問題提起
[2] 『資本論』第1部のテーマとその変遷	[3] 日本での「資本家制度」・「資本主義」
[3] 『資本論』における「資本家的」概念	a) 堺利彦の「資本家制度」
2 「資本家的生産様式」の分析としての『資本論』	b) 日本での「資本主義」概念の訳語と
(1) 「資本家的」概念と「資本主義」	その実体設定
1) 「収奪」概念から出発した「資本主義」	2) 「資本主義的個人主義」
ー ルイ・ブラン	3) 体制イデオロギーとしての「資本主義」
2) 非文化的要素としての「資本主義」	[1] 「私的資本主義」とケインズ
3) ロードベルトゥスによる「社会システム」としての「資本主義」の位置づけ	[2] 「体制イデオロギー」としての「資本主義」
(2) 新しい「国富」形成の社会的認識としての「資本主義」	[3] 「戦争」を経済機構の中に組み込んだ「体制資本主義」
1) 「国富」形成の歴史のエポックとしての「資本主義」	
[1] 素朴なブルジョアの企業家精神：サ	[註釈]
	[文献一覧]

[凡例]

[注] は次の2通り：

1 (#..)：文献引用注で各ページの脚注。人名などの(アルファベット)表示は[文献一覧]中の索引のためのもの。

2 (*..)：[註釈]のもので、この論文本文の後にある。

1 「資本」

(1) "capital"の原初形態

[1] 統治者の支配下にある資産総体

1086年頃に成立したとされるイングランドの人口・資産統計『ドムズデイ・ブック』^{#1}には、"the Tenants in capite" という項目が出てくるが、これは「国王が直接支配していた土地および人民」を意味していた。この場合"capite"は「資産」を指し、その中身は問わず、人民全体の総称としての「資産」であった。このことに関して、ヘンリー・エリスは「個々人の名前を除外した生きた自由な人間」を意味するとしている。そしてその中身は「ブルゲス」を指していると述べている^{#2}。

[2] 個人的資産

1215年に成立したイングランドの『マグナ・カルタ』^{#3}には、個人の資産に関する叙述が出てくる。「資産」を意味する"capitali, capitalis"がそれである。この場合「資産」は『ドムズデイ・ブック』にみるような（例えば個人ではない「王」とか「～侯爵」）機構としての保有者にとってのものではなくて、それを保有している個人とその個人に対する権限者との関係によってプラス・マイナス関係なく「資産」として考えられている^{#2}。

ここで「資本」概念上、注目に値する考え方は、「マイナス」資産である。後年ヘーゲルは『論理学』のなかで、これに言及して次のように述べている：

対立しているものは単にただひとつの無関心なものにすぎないのではなくて、二つの無関心なものもある。つまりこの二つは互いに対立したものであって、同時に自己に反省したものである。その意味

では差別的なものとしてある。だから、 $-8 + 3$ の中には一般に11個の単位が存在している。… 資本はその能動的規定と受動的規定がプラス・マイナス・ゼロになるときでも、第一に $+a - a = a$ として依然として積極的な資本である。しかし第二に、それは複雑な仕方でも二重にも三重にもなる。^{#4}

マルクスも「国債」という債務証券の性質に関して次のようにいう^{#5}：

国は借り入れた資本に対していくらかの額の利子を年々自分の債権者に支払わなければならない。この場合、債権者は自分の債務者には解約を通告することはできず、ただ債権を、つまり自分が所持しているという名義を売ることができるのみである。資本それ自体は国によって喰い尽くされ、消費されている。それは最早存在していない。国の債権者が所持しているのは、1) 例えば、100 円という国の債務証券である。2) この債務証券は債権者に対して国の年々の国家歳入つまり、年々の租税の産物に対するいくらかの金額、例えば5 円または5% の請求権を与える。3) 債権者はその100 円債務証券をいつでも他の人々に売ることができる。… 国債という資本ではマイナスが資本としてあらわれる…

ヘーゲルの「資本」概念、そして経済認識がその時代の生活・経済感覚（18世紀後半から19世紀前半にかけて）に基づいていて、「国民経済学」の観点から経済現象を分析していたことは、最近のプリッターが述べているところでもあるが^{#6}、上記の「資本」概念や、『法の哲学』のなかでの「資産」概念^{#7}などは現在の「資本主義」が実践している概念・イデオロギーでもある。

[3] "Live Stock"

"capitali (s)"が「資産」を意味する概念として用いられている例は、上記で見てきたので

#1：『ドムズデイ・ブック』[文献はこの論文末の「文献一覧」参照。以下同じ] (DOMESDAY)

#2：エリス, Vol. 2, p.488...また, pp.491-493(*1)なお詳細は、『ドムズデイ・ブック』1186ページ以下参照。(ELLIS)

#3：『マグナ・カルタ』(MAGNA CARTA)

#4：ヘーゲル『論理学』：SK：Bd.6, SS.61-2/ 中. 62-3ページ (HEGEL-1)

#5：『資本論』第3部：MEW版、S.482/ 国民文庫版、第7分冊、265-7ページ (MARX-5)

#6：プリッター『経済学者ヘーゲル』、第1章「ヘーゲルにおける経済学の位置」参照 (PRIDDAT)

#7：ヘーゲル『法の哲学』§ 199-200参照 (HEGEL-2)

*1："The Tenants in capite"：SUFFOLKでの例

*2：『マグナ・カルタ』での「個人的資産=capitali (s)」

あるが、その実態をなすものがやはり問題とされなくてはならない。その実態は最初は「豚」やその他の家畜が商取引の対象となつて、そのもの自体が「資産」として考えられるようになった。生物（ナマモノ）の資産である*3。これに関しては、テュルゴが、家畜の取引も貨幣以前には「資本」運動と考えていたのであるし、またその後種々そのように考えられていった*4。

テュルゴ『富に関する省察』（1766/69-70年：文献一覧参照）は次のことを明かにした：

将来に対する備えとしては年々の取得物から貯えをするということが、「資本の蓄積」なのであり、この場合に、それに資するのは家畜や奴隷という動的富（richesses mobilières）の他、「貨幣」である。これらは従来の基本的な富である「土地」の価値と比較されるようになった。そこから「貨幣」が土地と交換されるものになった。「資本の最初の用い方であった」。だからここに「貨幣」が「資本素材」として機能するようになるのであった。*1

（2）利益と「資本」

〔1〕「現在あるもの」を将来の資産と見なす考え

すでに『ドムズデイ・ブック』以来、当面問題になっている人間や土地が「資産」として考えられていることはこれまでに問題にしてきたが、この「資産」は Δ を産みだす源であるという考えを整理したのは、ルカ・パチヨリであった（1494年）。パチヨリは現金はもちろん、宝石、貴金属、毛織物など布およびその製品、そして「アラビア産の生姜」などを、現在商取引のために在るものとして登録するが、ここに登録されているものは将来の資産なのだとした。「アラビア産の生姜」というのはパチヨリが説得講義をしているヴェネツィアでの商取引に際しては生鮮食料品である。これが利益を産む基と看做された（caudale）のであった*2。

このように考えれば、そこに存在するものは全て、商取引の対象としては「資本」なのであった。

〔2〕資産の源泉としての貨幣＝資本

ドイツ地域では17世紀半ばに「貨幣」を「資本」と看做す見解がでてくる。ゼッケンドルフやベッヒャーの考えである。ゼッケンドルフは『ドイツ王国』（1656年）のなかで、「緊急事態のおりには人頭税か各人当りの一定の貨幣が納入されるべきである」と、納税の義務について論じる。この場合、人頭税（Capitation oder Kopf=Steuern）の納入者が資産能力を有していることが基礎にあり（Capital=Steuer）この税は同時に「資産税」なのだとした*3。またベッヒャーは『政治論』（1668年）で、商業の発達と商人の活動が貨幣に象徴されて、この貨幣的な基金が資本なのであること、この資本によって商人の自由行動が保障されるとした*4。18世紀の半ばになると、イギリスでは「利子」生む資源の問題として典型的には、ヒュームがそれを提唱した*5。ドイツではカメラリストがこの「資本」を収入源として考えるようになる。ダルイエスの考えにそれが表れた。

- 1 恒常的に利用できる既存の「貨幣」であること、
- 2 年単位を超えて続けて恒に産みだされている資産として存在しているもの、これは基金（Fond）である。このような規定に当てはまるのが「資本」で、「資本」として存在するものは国家および臣民の富である*6。

ダルイエスについてはヒュームの影響が大きいというのがロツシャーの『ドイツの国民経済学者の歴史』での論である*7。「資本」という場合、「利子」がその属性として考えられ「取

*1：テュルゴ：『富に関する省察』参照（TURGOT）

*2：ゲーエスパーク『古代複式簿記論』p.14/45；（GEIJESBEEK）／#3：ゼッケンドルフ『ドイツ王国』、S.498/第5版：S.453（SECKENDORF）／#4：ベッヒャー『政治論』：SS.123-4（BECHER）／#5：ヒューム「利子について」、『政治論集』（HUME）

*6：ダルイエス『カメラリスムス学問の第一の原理』、「序説」§13参照（DARJES）

*7：ロツシャー.S.419参照（ROSCHE-2）

*3："pig"と商取引／*4："live-stock"と「貨幣」・「資本」

入」を産むという点は、まさに21世紀の今日的発想である。

同様の考え方はフィヒテの『封鎖商業国家論』(1800年)にも見られる。ここでは商業・商人が貨幣を「資本」として「人間」も含めた総体が、国家収入源として想定されている。そしてこの「資本」が国民のその他の階級である「生産者」と「職人」(商人・生産者・職人=臣民:ウンタータン)の間を取り持って、生活を基本的に維持し、国家の職員や軍人(貴族などはここに入ると思われる)の生活を保障する(貨幣→租税=彼らの生活費)機構を描いている。この場合には、この臣民+貴族(国家・軍人)で国家を支えているので、全体で、国民=資本という定式がなされている^{#1}。この場合の「資本」は、増え続ける貨幣の設定である^{#2}。

このように見てくると、「資本」を基金とするのはまだしも、貨幣であるとするのは、いかにドイツ地域でのこととはいへ、「資本」の部分しかみていないことになる。アダム・スミスは『国富論』(1776年)のなかで次のように述べた:

流通の大車輪であり、商業の偉大な用具でもある貨幣は、職業上の他のすべての用具と同じように、資本の一部、しかも極めて貴重な一部であるが、それが属している社会の収入のどのような部分をなすものでもない。またこの貨幣を構成している金属片は、その年々の流過程において、当然に各人に帰属する収入をその人に分配はするが、それ自体としてはこの収入のどの部分をもなしてはいないのである^{#3}。

[3] "capital"="stoff"の考え方

スミス『国富論』の「資本」概念の提起を受けて、ドイツ地域でも「資本」に対する考え方

が変化してくる。ゾーデンは1805年に『国民経済学』を「国富の源泉およびこの国富を支える手段についての哲学的考察」の副題で発表して「資本」を位置づけた。その際に、富の生産を三つの場合に分けて論じている:

経済的(oekonomische)/非経済的(unoeconomische):
消費尽くされてしまうもの/不経済的(antioekonomische):
作られて存在しているが利用できないもの

「経済的」カテゴリーでの生産体系は「資本的あるいは資本家的」である。この場合「資本的」の条件は、この生産が「再生産」を基調とするということである:

経済的[生産]というのは、生産力(生産期間の生産者の生活を維持する、つまり生産能力に十分に達するように飲食するとかその他が必要十分であるような)の消費が、その消費される生産物を通じて釣り合いがとれるような生産のことである。

経済的生産は、とにかく、厳密に経済的、あるいは、資本的である。

厳密に経済的というのは次のような生産のことである:つまり、均衡を保っている場合であり、資本的(一般的に再生産的であると理解して差し支えない)というのは、利用手段の余剰があって準備が出来ている場合である。^{#4}

「生産者」が「資本」と関係をするのが指摘され、生産者の生活を維持することによって、その能力の発揮になり、「資本」形成に繋がることが予見された(Capital=Stoff)。それ故、ゾーデンの「資本的・資本家的」生産というのは重要な問題提起として受け取れるのであった^{#5}。

#1: フィヒテ『封鎖商業国家論』,第1篇・第2章の臣民の内部構成論と第2篇・第3/4章の国家収入=租税=臣民からの貨幣=資本論(FICHTE-1)

#2: フィヒテ『法律学』第2篇・第3章「資本」・「利子」各論参照(FICHTE-2)

#3: スミス『国富論』:第2編2章、Bd.1、p.275/文庫2,261ページ(SMITH)
(ドイツカメラリズム学問:私の「ドイツカメラリズムと経済学」参照)

#4: ゾーデン『国民経済学』:Bd.1,SS.147-148.なおBd.4,SS.86-90(ウィーン版)では、この区分が整理されて叙述されている。(SODEN)

*5: ゾーデンの「資本的生産」についてーヒルガーの整理

（3）賃労働と「資本」

1）「工業」と労働者

〔1〕「機械制大工業」と労働者の運命

1845年に、エンゲルスは『イギリスにおける労働者階級の状態』（以下、『状態』）のなかで、「労働者」（「プロレタリアート」）を、産業革命の急速な展開のなかでの「機械制大工業」との関係で位置づけた：

イギリスにおける労働者階級の歴史は、前世紀の後半〔18世紀後半〕、すなわち蒸気機関と。綿花を加工するための機械の発明とともに始まる。これらの発明は、周知のように、産業革命にたいして原動力を与えたのであって、この革命は、同時にブルジョア社会を変革し、その世界史的意義はいまようやく認識されはじめたばかりである。…^{#1}

綿織物産業の「労働者」はこのような「機械」以前には自分の家で作業をしていた。しかし「機械」とともに自宅から工場へと仕事場が移動し、生活それ自体が完全に「機械」（工場）と結びついたものになっていった。「労働」（しかも「機械」の命令のもとで）しかなし得ない「プロレタリアート」としてその生涯を再生産していく存在になっていったのであった。

最初のプロレタリアートは〔システムとしての〕工業にぞくし、工業によって直接生みだされた。したがって工業労働者、すなわち原料の加工に従事するプロレタリアが、まずわれわれの注意をうばう^{#2}。

エンゲルスは、「工業」（Industrie）が「資本」と関係していること、しかも「大資本を必要とし」（erfordert große Kapitalien）、その結果所有を集中させて、富を生みだす能力・資産を集中していくことを指摘した：

工業がどのようにして所有（Besitz）を少数者の手中に集中させるか…。工業は大資本を必要とする。これによって工業は巨大な設備を建設し、そし

て小手工業ブルジョアジーを破滅させるし、このことによって自然力を自分の支配下に置いて個々の手工労働者を市場から駆逐する。..数多くの「在りし良き日」の小中間層が工業によって粉碎され、一方では富裕な資本家に、他方では、貧困な労働者に分解されてしまったということは否定することができないし、逆にたやすく説明し得る事実なのである^{#3}。

以上のことをエンゲルスは1844年の「国民経済学批判大綱」のなかでは「自由競争」原理の機械工業的貫徹としての「工業」が「労働者」を機械の奴隷に仕立て上げていて、このことが「私的所有」の結果なのであることを指摘していたが、『状態』でのエンゲルスの言にあるように、それは「自由競争」一般からの論理的帰結にすぎないのであった^{#4}。「工業」は自由競争の実践でしかなく、自由競争はこの工業の依って建つ原理なのだから、「工業」の分析が重要なのであった。ここでは「プロレタリアート」と「ブルジョアジー」の形成基盤が明かにされたのであった。

このようにして生まれてきた労働者と資本との関係はどのようなものであったのか。エンゲルスの説明は次のようである：

…工業にあっては人間、つまり労働者は、小片の資本（ein Stück Kapital）としてしかみなされていない。だから工場主はこの小片資本に対して、それを自分の思い通りに利用する代償として労賃という名目で利子を支払うのである^{#5}。

「工業」は「大資本」として存在し、したがって多数の「小片資本的」（「大資本」の部品）労働者が工場に集まり、生活空間として「都市」が形成される。このなかで、費用である「利子」付き資本（賃金を支払わなくてはならない）をできるだけ安く抑えようとして、「小片資本」相互に競争を招来させる。賃金競争が人間世界を支

#1：エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』『状態』、S.11（初版、以下同じ）／『全集版』、230ページ（ENGELS-2）

#2：同、S.32/247ページ

#3：同、S.32/247-8ページ

#4：同、S.33n/1892ed.S.20n。ただし英語版ではその指摘は省かれている（cf.p.20）

#5：同、SS.33-4/248ページ

配していくのであった。「小片資本」がその存在否定の憂き目に遭う次元で多数の集積として人間価値に目覚めるのが「階級」としての自己存在であった。このことをエンゲルスは『状態』の最終章で「プロレタリアートに対するブルジョアジーの態度」で明かにしている。

[2] 「救貧法」と労働者階級の形成

1834年の「救貧法」は、それまでは社会的弱者を救うという考えの許に実施されてきた、1601年以来の、とかく「無駄が多くなる制度」とは異なって、神が承認しなかった「悪」を社会から徹底的に取り除いて、この「悪」が社会に目に見える形で存在しているために自分たちブルジョアが自分たちの社会を謳歌できないような状態を、この世から消す方策にでた。

1601年からのそれまでの「救貧法」では、社会的弱者は基本的にあわれみの許に救済される制度であったが^{#1}、しかし1803年にマルサスはそれでは社会悪はいっこうに無くならないどころか、増大して行ってしまい、「まともな人々（ブルジョア）」が自分たちの生活を謳歌できないので、この「悪」を取り除く（社会から抹殺する）ことはもちろんのことだけれど、この「悪」をはびこらせる原因になっている「あわれみ」の「救貧法」そのものを取り除くべきであると彼の『人口論』の第2版で述べた^{#2}：

自分が予定した両親からその生存を許可されないような人間、また社会が彼の労働を必要としないような人間はすでに悪魔にとりつかれているのであ

て、食物にたいしてどれだけの割合をも要求する権利を持っていないし、彼の存在を許すかもしれないのような仕事にも、事実として与らないのである。自然界の強力な宴にあっても彼のための席はないのである。もしも彼が自然界の宴にさそわれた他の人々の同情を曳きだせないなら、自然は彼にでていけ、とすぐさまその命令を実行するだろう。もしもそこに居合わせたゲストが彼に居場所を提供するのなら、他の侵入者も同じ恩恵を要求するだろう。...

このような「悪魔にとりつかれた」人間が生存している限りその他の人々（自分たち僧侶やブルジョアジー）の幸福は妨害されるのだ、というものであった。この考えは、1803年に、頭に血が上ったマルサスの露骨なうっぶんばらしだったので、その後の版（1806年以降）では省かれた。しかし、1834年の「救貧法」策定の委員会のメンバーの一人であるシーニョアはこの考えと同じものを有していたとは、ニコルスの『救貧法史』を修正補完したマッケイの言うところであった^{#3}/^{*6}/^{*7}。シーニョアは「経済学者」として「救貧法」委員になったのであるが^{#4}、その「経済学」の段になると「救貧法」策定過程での彼の見解はでてこず、せいぜい「先輩」のマルサスが「労働者階級の性癖が」この階級の賃金の動向に反映されているのだ、と「悪の根源」と低賃金の正当性を匂わせているに留まっている^{#5}。

エンゲルスはこのような「新救貧法」は1833年にブルジョアジーが選挙権を獲得して、資本家の集団として徒党を組んでプロレタリアー

#1：テオバルド『実用の救貧法』は歴代「救貧法」の条文と、そのもった意味について、実施の側面からこれを考察している、簡約版としては、ラムレイ『貧民救済用便覧法規集』Vol. I. "Statute 43 Eliz. c.2. Relief of the Poor" をも参照。(THEOBALD/ LUMLEY)

#2：マルサス『人口論』第2版,p.531、またローズ『イギリスの救貧法』、pp.43-45 (MALTHUS-1/ ROSE)

#3：参照、マッケイ編『イギリスの救貧法史』Vol. III, pp.11-13 (MACKAY → NICHOLUS)

#4：ニコルス『救貧法史』、Vol. II, p.226/ ブルンデージ『新救貧法策定』、p.19/ ノット『人民の反抗』、p.52など。(NICHOLUS/ BRUNDAGE/ KNOTT)

#5：シーニョア『経済学概説』/ マルサス『経済学原理』(1820)、pp.247～(SENIOR-1) / (MALTHUS-2)

*6：シーニョア：『イギリスの救貧法』/ *7：ニコルス『イギリスの救貧法史』の基本的性格

トを締めつける政策作りとその実行にでたのだと述べた^{#1}。プロレタリアートであった労働者の方も団結してこの資本家に立ち向かわなければ、神によって消されることになってしまうのであった。「消される」前に「消し方」を粉碎する必要があった。エンゲルスは産業革命と救貧法が労働者階級を作り出したと指摘した^{#2}。

[3] 労働者階級と資本家階級の闘争の開始

エンゲルスは1845年の『状態』のなかでは、「ブルジョアジー」のカテゴリーには「貴族」をも含めて考えていた^{#3}：

私がここでブルジョアジーと言う場合には、いわゆる貴族をもここに入れている。貴族はブルジョアジーに対してのみ貴族であり特権者なのであるから。しかしプロレタリアートに対してはそうではない。プロレタリアはこの両者を有産者(Besitzenden)、つまりブルジョアとしかみなさない。所有(Besitz)という特権の前にはその他のいかなる特権も消える。両者の違いといえば、本来のブルジョアが工業そして部分的に鉱山プロレタリアに、また借地農としては耕作日雇い賃金労働者と対立するのに対して、いわゆる貴族は鉱山プロレタリアとは部分的に、そして耕作プロレタリアと繋がっているにすぎないのである。

しかしここに「労働者階級」が誕生し、資本家側も政治を舞台にして、これと向かい合う次元に入ってきたのであり、「ブルジョア一般」という社会認識は変化することになるのであった。エンゲルスは『状態』の結びで次のように述べている^{#4}：

...現在すでに個々ばらばらに、そして間接的におこなわれている富者に対する貧者の闘いはイギリス

では普遍的にそして完全なものになるだろう。平和的な解決は時期を逸してしまった。諸階級はいっそう鋭く分裂し、反抗精神はますます労働者間に浸透し、憤激は激昂し、個々のゲリラ的なこぜりあい集中してもっと重大な戦闘になり、ちょっとした衝動も雪崩をうって大きな行動になるだろう。そのときには「宮殿へは戦争を、我が家には平和を！」の闘いの声が全土に轟くであろう。富者が用心しようとしても、時既に遅しなのである。

のちに1871年の「パリ・コミュン」を総括したりサガレイはフランスでも「資本」による人民収奪が激しくなり、1866-7年の労働者の連帯の国際組織である「インターナショナル」がこの問題を取りあげている、と述べた^{#5}：

... [67年]インターナショナルはローザンヌで第二回大会を開いており、ドイツの労働者がこの大会にベルリンの学生とは反対に、戦争に反対する激烈な訴えを送っていた。前年のジュネーブの大会がローザンヌの大会を召集したのだった。大会は、資本の収奪から人民を解放することに関する新たな問題に直面し、話し合いがなされ、...

2) マルクスによる同時代の社会の「富」規定の変化

[1] 『経済学批判』と『資本論』

マルクスの「資本家的」という概念は、『資本論』で確定したものである。1859年段階の『経済学批判』a)と、1867年の『資本論』b)の「社会の富」の性格づけの変化に読み取れる^{*8}。

a) 一見するとブルジョアの富は巨大な商品の集積であって、個々の商品はこの富の要素的現存在として、現われている^{#6}。

b) 資本家的生産様式が支配する社会の富は、一種の「巨大な商品の集積」として、個々の商品はこ

#1：エンゲルス、SS.339-40/520ページ (ENGELS-2)

1832年に「選挙権」を獲得した、ジェームズ・ミルなどの「急進派」が実際に「貧困者」締めつけのブルジョア集団の指導的立場になっていたとの指摘は、ブルンデー『新救貧法策定』でも強調されている (p.11) (BRUNDAGE)

私も「急進派」について「事典」で解説を試みたが、対「貴族」に論点集中し、対「労働者」のブルジョア階級観点が欠如していた。

#2：エンゲルス：『状態』、「プロレタリアートに対するブルジョアジーの態度」

#3：エンゲルス：同前、S.328/510ページ) / #4：エンゲルス：同前 S.354/533-4ページ)

#5：リサガレイ：『1871年のコミュンの歴史』、1896年版、p.17/デュノア版、p.16/日本版、上.29ページ(LISSAGARAY)

#6：マルクス：『経済学批判』、本文冒頭 (MARX-1)

*8：『経済学批判』と『資本論』(第1部)冒頭の文章 (原文)

の富の基本形態として、現われている^{#7}

マルクスが生活していた当時の「社会の富」の性格づけが、1859年の時点では「ブルジョアの富」とされていたものが、1867年の『資本論』の次元では、「資本家的生産様式が支配している社会の富」に変化したのである。「ブルジョア的」という社会構成体不問の概念から、この社会の基本的な人間・生産関係を明確にした概念を用いて分析が開始されたのであった。マルクスが『資本論』を発表する以前の段階ではマルクス自身「ブルジョア的」という概念を普段に用いていた。この概念規定の厳密化は、この当時にすでに『共産党宣言』（1848年）^{#1}などに明確に現われていたように、「資本」とそれで表された人間関係が、敵対的矛盾体系を蔵した「賃労働と資本」の関係として表出してきたからであった^{#2}。ここでこの問題をその背景にあった「資本関係」の創出過程として観ていこう。

〔2〕『資本論』第1部のテーマとその変遷

「資本主義」という概念がどうしてできてきたのか。これを観ていくとその結節点を構成しているのはマルクスの『資本論』であることが判る。このことに関しては、1918年のパッソアの「資本主義論」も指摘したところであった^{#3}。

マルクスの『資本（論）』は副題を「ポリティカル・エコノミー批判」としたものであった。これは3部から成り立つ計画であった。この3部から成り立つ『資本論』のそれぞれのテ

ーマは次の図に示されているような状態であった（刊行版）。

第2・3部はマルクス（1818-1883）の死後にエンゲルスの編集によった。したがってマルクスによって現実に公にされた「資本論」のテーマ設定は第1巻・第1部のみであった。しかもドイツ版とフランス版のみがマルクス自身によって発刊されたものなのである。このなかでフランス版、イギリス版（エンゲルス版）共にドイツ版とはテーマが異なっている。フランス版（Le Capital 1872年—ローア訳であるがマルクス自身がかかり手をいれたものである）：表紙には副題もなく、「第1部」の記載もない。しかし本文の開始ページにそれがでてくる。ドイツ版・フランス版・イギリス版の比較をしておこう^(図2)：

マルクスは『資本（論）』第1部を1867年にドイツで発表し、ついでフランスで1872年に、そしてマルクス自身ではなかったが、エンゲルスの手で1887年にイギリスで翻訳発表された。この間1872年にドイツ版の改訂、そして第3版を1883年に取り掛かりこの年のマルクスの死後エンゲルスの改訂を加えて出版され、1890年にドイツ版の第4版がエンゲルスの手で改訂出版されている。

『資本論』全3巻は著者たちが生存していた時期に順次刊行されて行ったわけであるが、その時期は、1867-1895年の30年近くに互った。この間、ロシアでも1872年に翻訳（第1巻：資本の生産過程）が出版され、その他ポーランドやイタ

図1

第1部：資本の生産過程（1867）	Der Produktionsprozess des Kapitals.
第2部：資本の流通過程（1885）	Der Cirkulationsprozess des Kapitals.
第3部：資本家的生産の総過程（1895）	Der Gesamtprozess der kapitalistischen Produktion.

#7：マルクス：『資本論』第1部、本文冒頭（MARX-3）

#1：マルクス/エンゲルス『共産党宣言』（MARX/ENGELS-1）

#2：重田澄夫『資本主義の発見』,219-220ページ参照

#3：パッソー『資本主義論』、参照：SS.78～

図2

ドイツ版	Erster Band. Buch I : Der Produktionsprozess des Kapitals.	第1巻・第1部：資本の生産過程
フランス版	Livre Premier Developpement de la Production Capitaliste.	第1部 資本家的生産の発展
イギリス版	BOOK I Capitalist Production	第1部 資本家的生産

リアなど、「世紀を越えて生き続けている書物」のテーマで『資本論』の生長を語っている、ウーロエヴァによれば『資本論』第1部は部分訳をも含めて1895年までに9種類の言語で翻訳配布したのであった*9。各種の「解説書」もマルクスやエンゲルス、そしてその支持者の手によって出版されて、『資本論』の存在は世界的になっていく*1。

しかしこの時間的経過過程で『資本論』のもった社会的意味合いは変化していったのである。そのことを『資本論』の副題および第1部のテーマの変遷が物語っている。後の「資本主義」概念化が「機械制大工業」に対するものであるとされることに現われているように、ドイツ語初版発行の1867年から5年後の1872年には、第1部のテーマはフランス版では「資本家的生産の発展」とされた。1883年の序文のあるデヴィユによる『資本論』の簡約紹介版もこのテーマを取り入れているが、ここでは同時に最初に「科学的社会主義概説」をもってきて、次から「資本論」（この題名は、表紙にある外は、各ページの上に欄外見出し的に印刷されているだけである）の「フランス版」第1部テーマが始まっている。このデヴィユ版はマドリードでも1887年に翻訳出版されている*2。そして、1887年、イギリスでの20年後の事態対応としては、『資本論』は、今度はこの発展している「資本家的生産」の「批判的分析」というのが「副題」と

して掲げられた。つまり「経済学批判」という一般的な命題から、「批判」の具体的な内容は何か、それは「資本家的生産」なのだということが明瞭に、『資本論』を、表題を一瞥しただけでその本質が掴めるようにしたのであった。

【3】『資本論』における「資本家的」概念

「資本主義（Kapitalismus/Capitalisme/Capitalism）」という概念は、『資本論』では用いられていない。しかしながら『資本論』で用いられた"kapitalistische Produktion"とか、"kapitalistische Produktions - Weise"などは、後に「主義」の問題として考えられて行く。しかしそれは種々のイデオロギー闘争の産物であった。日本ではこの言葉が出てくれば、旧くは第二次世界戦争前の訳そして現代では長谷部文雄の訳および今村仁司などの訳で、「資本（家）的」となるが、これら若干の訳を除いては必ず「資本主義」と訳されるのであった。

ヨーロッパでは、最近のマルクスの『資本論』、およびそれに関する諸原稿等の翻訳にあたっては、『資本論』それ自体に関しては「資本家的～」に対しては「資本主義」の訳語は用いないが、「直接的生産の諸結果」の中での"Kapitalverhältnisse"（資本関係）を"the rerationships of capitalism"（資本主義の関係）と訳をするのも現れた*10。

*1：『資本論』は日本では1919年に最初の翻訳が出版される...生田長江『資本論』第一分冊、東京、緑葉社、1919。堺利彦が「あとがき」を付けている。- MARX -tjl 参照)

*2：『資本論』簡約版：デヴィエ（Deville）版（MARX-3*Le Capital de Karl Marx）

*9：エンゲルスの死（1895）までの『資本論』の刊行の歴史

*10："Kapitalverhältnisse" の"capitalism"解釈

2 「資本家的生産様式」の分析としての『資本論』

(1) 「資本家的」概念と「資本主義」

1) 「収奪」概念から出発した「資本主義」： ルイ・ブラン

「資本主義」という概念はヒルガーによれば、フランス革命の時期にフランスで用いられたのが初めて、その後イギリスやドイツで大体1869年頃までには使われるようになった^{#1}。最初に大資本の手に小中資本を収奪的に集中する概念として「資本主義」のタームを用いたのはルイ・ブランである。1850年の『新モンド』誌上であった^{#2}。

吾々は、パスチヤ氏の全議論の基礎をなしてある所の詭辯が何から成ってあるかを知っている。その詭辯は、資本の効用と、私が資本主義――即ち他者の排除に於ての一者による資本の私有――と呼ぶところのものとを、永久的に混同することから成っている。丁度、一つの物の効用が、その獨占から生じその性質からは生じないかのやうに！

(『労働の組織』にそのまま転載されているので、日本語訳：浅野研真『労働の組織』、216ページ参照)

ルイ・ブランは、フランスで「資本」が、労働者はもちろん、中小の起業者をも没落させて独裁的な資本支配（「資本主義」）を行うのだとして、当時盛んになってきていたバステアの自由競争賛美論――貧困や生活上の諸矛盾は経済に任せておけば自然に解決するということ――（『経済調和』1846-50年）^{#3}に対して対決するのに、「他者の排除」によって「資本」を独り占めする、そのような私有体制として「資本主義」を用いたのであった。ルーヴェも1861年にこの「資本の集積」問題が経済学上で重要であると述べている^{#4}。

しかしながら、この概念が用いられ始めた

きは、たいていの場合、それがその社会を規定する生産様式との関係であることは考慮には入っていなかった。

2) 非文化的要素としての「資本主義」

「資本主義」を社会的な観点から観て、文化上好ましくないイデオロギーであるとともに、非文化を刻印しているものであるという批判は、ウィルヘルム・リープクネヒトの言に表れていた。1872年に行われた、彼のドレスデンでの記念講演である『知識は力であり、力は知識なのである』で述べられたのであった^{#5}：

教育の機会均等性は文化の必要性である。教育の同等性は文化の理想である。概して人間の進歩は同等性への接近にある。自由性はすべての可能性に恵まれるという決まり文句である。同等性は原則である。或る国家の成員の生活上および精神上の状態における大きな違いは当然ながら弊害であるし非文化の証である。そこで人々は次のように考える：この弊害は概してアジア的な不完全な文化の最も汚れた染み痕であって、支配者どもや何千という彼等の家来どもは膨大な富に充たされ、何百万の国民が最も恐ろしい貧困を宣告されていることなのである、と。トルコ・インド・ロシア・ベルシャでは上層部はわれわれが想像もできないほど贅沢を尽くしている。下層部分ではわれわれが残念ながら簡単に想像がつく貧困があるのだ。しかしながら近代的な産業主義そして資本主義はこの傾向を持っていて、東洋的な不完全な文化・未開性の隠れた部分がわれわれに合法化されているのである。つまり極端な富と極端な貧困との間の対立が直接的にそれぞれ定立しているのである。資本主義と産業主義が最も早く支配的になったイングランドでは、すでにアジア的な見本がかなりの程度到達している。そこではただ贅沢は洗練されていてそんなにはあからさまには公然とは刻印されてはいないだけである。

#1：ヒルガー「資本」、SS.442-443 参照（HILGER）

#2：ルイ・ブラン『新モンド』誌（*Le Nouveau Monde*）. 第8巻、1850.2.15: この巻は "Le Cr dit" 特集であり、ここでバステア批判の「資本主義」論が展開されている。これが単行本の、『労働の組織』にそのまま組み込まれている。（BLAN-1/-2）

#3：バステア『経済調和』（BASTIAT）

#4：ルーヴェ『経済学上の関心事』、p.377参照（LOUVET）

#5：ウィルヘルム・リープクネヒト『知識は力であり、力は知識なのである』、S.19.（LIEBKNECHT-1）

3) ロードベルトゥスによる「社会システム」 としての「資本主義」の位置づけ

「資本主義」概念はドイツで1869年に用いられる。ロードベルトゥスの『今日の土地保有に対する信用需要の解明とそれへの方策について』の第Ⅱ巻においてであった。次のよう^{#1}：

...労働と土地および資本所有(*)が分割されている状態にあっては、どのような企業もそしてまた土地経営も、資本を所持(*)していなければ運営できない。それ故に土地および資本の所持が、2つの階級のもとに分割されていて、同時にその間の交通がなされる余地がある場合には、資本の側が有利性を持っているので、一時的であるにせよ、資本の優越性が形成される。これはまさに資本主義のシステムなのだといえる。このシステムにおいてはすべての国民経済の分野は資本観点の一方的なものから判断されるのであって、資本的なものによるすべての目的および利害によって決定されるのである。したがってこのシステムにあっては、その他の国民経済の対象は、それがたとい凹面鏡的に窪んだ形で全体が移っているとしても、それは資本的に歪曲された形として現われているのである。すべての国民経済的な利害は、資本的にさも資本のためにあるかのように搾取されるのである。

(*):"Besitz"は「所持」/"Eigenthum"は「所有」とした。

ロードベルトゥスは、元来、土地所有によって地代を集積することが必要なのだが、資本運動によって土地それ自体が抵当証券化してくるなかでは、社会システムとして運動しているなかでは、土地所有それ自体を持続することが大変困難なことである、と述べていたのであった^{#2}。

このように「資本主義」をシステム概念として位置づけたのは、ロードベルトゥスが最初であろうと思われる。すでにゾーデンが「富」の再生産のシステムとして「資本的生産」を位置

づけていたが、「国民経済」全体との関わりで「資本」を位置づけたのは、ロードベルトゥスであろう。

後にフリードリヒ・ウィーザーは、土地経済と資本の権力の問題を扱った箇所^{#3}で、ロードベルトゥスを引き合いに出して、ロードベルトゥスの資本的社会システムの許で、そのシステムを構成している種々の構成部品の運命について論じた^{#3}：

資本家的権力が貫徹する、その影響分野に関しては、土地耕作に関する古典派的自由の教えは通用しない。権力によって搾取された労働者は最早、その法的に保障された自由を実際問題としては有効にはし得ない。ロードベルトゥスは正しくも次のように言った、つまり、労働者に対しての飢えの措定は、奴隷に対する鞭のようなものであると。

(2) 新しい「国富」形成の社会的認識としての「資本主義」

1) 「国富」形成の歴史のエポックとしての「資本主義」

[1] 素朴なブルジョアの企業家精神： サッカレイ

ヒルガーは「資本主義」という概念をイギリスで最初に用いた例に、サッカレイの『ニュー・カムズ』(1854/55年)を挙げている^{#4}。そこでは「資本主義」は、ブルジョアジーの或る家族が、鉄道建設に資本を投ずる話で、利益の割合が良好であることに、プライドを持ってことを進めるといふ意気込みのことを指している。この場合に「資本主義の精神」という言葉が用いられているのである^{#5}。

この場合に注目しておいてよいことは、「資本主義」は「私的」レベルで語られている(サッカレイの場合には「家族」であるが)ことである。

#1：ロードベルトゥスの『今日の土地保有に対する信用需要の解明とそれへの方策について』第Ⅱ巻、「序論」、SS.XV-XVI. (RODBERTUS)

#2：同前、SS.XIV-XV/377-8.

#3：フリードリヒ・ウィーザー『社会経済理論』、第2版、S.284. (WIESER-1)

#4：ヒルガー「資本」、前掲、S.443.

#5：サッカレイ『ニュー・カムズ』Vol. I 参照、pp.74-5. (THACKERAY)

[2] キリスト教の「倫理」

1867年の『資本論』後に、「社会主義闘争」との関係で「資本主義」を論ずるのではなくして、むしろ「合理的な精神」の問題としてこの概念をキリスト教の立場から位置付けたのは、イギリスではカウフマン、そしてドイツではマックス・ウェーバーであった。

イギリスではカウフマンが、シェフレが1870年に『社会主義と資本主義』を発表したのを捉え、そしてその論を基盤にして、1877に『社会主義：その本性、危険性、そして処方箋』という著書を発表する。このカウフマンはやはりシェフレ同様に「資本主義」を肯定的に「進歩的傾向を有している」としている^{#1}。

カウフマンは1895年に『社会主義と現代思想』を発表して、「資本主義」については、キリスト教を改革していくこととの関係では次のように位置付けた^{#2}：

カトリック改革者は、マルクスがルターを資本主義の元祖だとしていることに同意している。というのは個人主義、プロテスタンティズムの子は現代の産業主義の親だからである。

同様に、社会主義者もまたプロテスタンティズムに関しては、それを「私的所有の宗教」、あるいは「ブルジョアジーの宗教」だとしている。

マルクスはルターをそのように命名したことはないが、「利潤」の生まれるわけについては理解していた、とはいつている^{#3}。

マックス・ウェーバーは1904-5年の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の中で次のように述べた^{#4}：

さまざまな宗派が存在する地域の職業統計に、ざっと目を通すとき、驚くほどしばしば、次のような事実を発見することであろう。それはドイツのカト

リック派の諸教会会議において、また同派の新聞紙や出版物において、しばしば論議を起していることであるが、近代産業における企業の経営者と資本の占有者は、その熟練労働者の上層部についても、また高度の技術的訓練をうけた人々についても、いづれもみな、著しくプロテスタント的傾向を濃くおびているという事実である。

カウフマンやウェーバーの論を受けて「資本主義」概念の原点をマルティン・ルターやジャン・カルヴァンに求める考えがある。シュピーゲルの『経済思想の成長』（1971年）がそうである^{#5}。ここでは指摘するだけに留める。

[3] 「国民経済」と「資本主義」

「資本主義」概念は「国民経済」の形成、したがって「国民国家」が形成される次元との関わりをもって発展してきた^{#6}。このことは最初にドイツ地域で問題にされたのであった。

1870年にシェフレが『資本主義と社会主義』を発表し、その中で、次のように述べた^{#7}：

資本家的生産は全くのところ高度な組織形態である。というのは、それは経済外的組織やモチーフを恣にする代わりに、初めて国民経済を自立させ、経済的基礎を据えたからである。

資本主義は文化史的に人間の巨大な経済的進歩を意味した。つまり資本主義はまず第一にそれを通じて経済的なことと共にしっかりした基盤を保証し、社会的な生産共同体に生き生きとした力として純粋な経済的なモチーフを入れ込んだのである。イエ経済、国家的・共同体的・教会・学校・その他の共同体というこの資本主義以外に存在している共同体的な財の形成・消費の形態がそれ自体から脱皮し得るためには、純粋な経済的な産婆を必要とさせたのであった。

ドイツでもこのシェフレの影響が主として「歴史学派」にでてきていた。1867年にマルク

#1：カウフマン『社会主義：その本性、危険性、そして処方箋』、p.221参照（KAUFMANN-1）

#2：カウフマン『社会主義と現代思想』、p.135参照（KAUFMANN-2）

#3：マルクス『資本論』第3部第21章「利子生み資本」、MEW.Bd.25.S.359/⑦59[°]-ジ参照（MARX-5）

#4：M.ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、SS.17-18/阿部弘蔵（訳）6ページ参照（WEBER）

#5：シュピーゲル『経済思想の成長』、p.79参照（SPIEGEL）

#6：参照：大塚久雄『国民経済』93ページ（OTUKA）

#7：シェフレ『資本主義と社会主義』、SS.124-126参照。（SCHAFFLE-2）

スの『資本論』第1部が刊行され、これは「歴史学派」の当時の大経済学者であったウィルヘルム・ロッシャーにも、その存在を確認させるには十分なものであった。しかしながらロッシャーはマルクスの『資本論』を無視はしなかったが、しかしあまり高くは評価していなかった。リカードの価値論を誤ったものとして考えていたロッシャーは<<国民経済学のシステム>>第1巻『国民経済学の基礎』においては、マルクスをもその系列に入れて済ませていた^{#1}。「資本家的生産様式」という、後にロッシャーなどを完膚なきまでに攻撃してくるタームなど思いもよらなかった。しかし1870年にシェフレが『資本主義と社会主義』を発表したことで、「資本主義」が原因で「貧困」が生じているとはシェフレがそもそも書いていなかったことを受けて（シェフレは1867年の『人間経済の社会システム』では「貧困」については、その原因を探らないで、その対策を国家政策の面で論じている^{#2}）、今度はこのシェフレの言を重要視して、『国民経済学の基礎』の1874年の版ではそれまでの「富」と社会との関係の叙述とは異なって「富」を規定するに至ったのである：

1854年以来「富」と社会的進歩との関係についてロッシャーは次のように考えていた^{#3}：

第三の時期[近代ブルジョア社会のこと...阿部]では資本が優勢的に行われている。土地は資本投下を通じて果てし無く価値的に増大する。産業においても機械労働が人間の手を凌駕するのである。

国民の富はこのようにして絶え間なく増大する。

しかし、下層中産階級はその堅固さと心地よさを取り外されてしまう。過度の豊かさは対極に乞食のような貧困をもたらすのである。

これが1874年版では、シェフレを「参照」と

して、次のような「富」の規定となる^{#4}：

第三の時期には資本はいわば指導的立場に在る。

... 国民の富はこれを介して間断なく増大していく。それはまた、まさに「資本主義」なのである。これは経済的行為を初めて高度に自立化させる。法が法治国家において土地所有、教会や家族をいわば[狭い共同体から... 阿部]解放していくのと同じようにである。（参照：シェフレ『資本主義と社会主義』、124ページ等々）

しかし、下層中産階級はその堅固さと心地よさを取り外されてしまう。過度の豊かさは対極に乞食のような貧困をもたらすのである。

このように「資本主義」概念はドイツの経済学界（歴史学派）で取り入れられたかに見えた。しかしながら、ロッシャー自身、<<システム>>の第3巻『商業および手工業の国民経済学』にあつては、16世紀前半頃の穀物取引について、最初は「民主的動機」から行われていたこと、しかしビュルガーが買い占めて値段を上げ上げて行ったことについて、淡々と述べているだけだったのが（1881年^{#5}）、1892年版ではアンダーラインした部分について、「資本主義と人は言う」とわざわざ皮肉を込めているのであった^{#6}（...なおアンダーラインは原文にはない）。「資本主義」概念は、元来ヒルガーの言にあるように、労働運動・階級闘争上のカテゴリーとして用いられるようになったものであった^{#7}。「貧困」とか「貧困対策」の段になると、シェフレ同様に、ロッシャーは、1894年の遺著である『生活の保護と貧困対策』の中では「資本主義」は顔を出さず、国家による対策の必要性に終始している^{#8}。

#1：ロッシャー『国民経済学の基礎』、1874年版97ページ参照（ROSCHER-1 Bd.1）

#2：シェフレ『人間経済の社会システム』、第2版（1967年）、SS.283-5/第3版第2巻（pp.482-486）（SCHAFFLE-1）

#3：ロッシャー『国民経済学の基礎』、1854年版、73-74ページ参照

#4：ロッシャー『国民経済学の基礎』、1874年版、95-96ページ

#5：ロッシャー『商業および手工業の国民経済学』1881年版、S.122 n8.（ROSCHER-1 Bd.3）

#6：ロッシャー『商業および手工業の国民経済学』1892年版、S.128 n8.

#7：ヒルガー「資本」、前掲、SS.442以下参照（HILGER）

#8：ロッシャー『生活の保護と貧困対策』、65ページ以下参照（ROSCHER-1 Bd.5）

2) 機械制大工業による富形成システムとしての「資本主義」

[1] 「産業資本主義」

『資本(論)』が1867年に発表された後で、ここでテーマになった「資本家的生産様式」("die kapitalistische Produktionsweise")という概念に対しては、この当時の社会の支配的な富生産・形成の概念として、「産業資本主義」と一般的に呼ばれている概念、しかも「機械制大工業」を指すものとして、用いられるようになってくる。このことを表現したものとして、クロード・ジャネットの『資本』(1892年)があり、「資本主義」を産業の形態であって、資本が工場制度をとったものであると述べている^{#1}。そしてイギリスではホブソンの『近代資本主義の発達』(1894年...以下『発達』)がある。ホブソンは工業に関する科学のめざましい進歩が産業革命を押し進めて行って、19世紀後半の産業の発展に繋がったこと、その中核が「資本主義」なのであったという。この場合、「資本」は産業が変化していく際のファクターとして機能すること、そしてその具体的な現実の形態は種々原料や商品類からなるのであるが、抽象的概念としては恒に「貨幣」か「貨幣の管理」である「信用」という形態をとると述べる。この考えは「資本」概念を教壇での教えよりも厳密に適用しているとして、マーシャルの定義と異なったことについて断り書きを付けている^{#2}。ホブソンは当初は「資本主義」が産業をめざましく発展させていったと考えていたが、1902年に『帝国主義論』を発表、さらにこの『発達』を

1906・1916年の改訂を経て、1917年の「ロシア革命」的世界のなかで、1926年の改訂版では「資本主義」の状態はどうであるかと見ると(1929年の世界大恐慌が迫ってくるマーケットの緊張関係のなかで)、富の生産状況は閉塞状態であって、プロレタリアートや労働者階級は生活物資に事欠いているが、生産技術は機械化のもとで利潤性のよい方向のみでの雇用方法に向いていて、大規模の消費マーケットが経済効率的に運営され、資本主義の精神は利潤創出可能なように企業の組織化を図っている、としている^{#3}。このあとで1930年代に入り、ホブソンは1930年に『合理化と失業』、31年に『溢れる貧困』そして32年には『資本主義から社会主義へ』と「資本主義」に否定的になっていくのであった。

すでにマロックは1896年に、マルクスが指摘した3つのことが進行していると『イギリスにおける階級と大衆、または富・賃金・福祉』のなかで述べた。「マルクスが指摘した3つのこと」とは次のことであった^{#4}：

*社会の大部分はコンスタントに貧困になっていき、

*未来は着実に不透明になっていく

*まったくの生活手段以外は、すべての富が着実に少数者の手に渡って行つて

そこで最終的な結果は遅かれ早なかれ、一方では、飢餓的な賃金のもとでの奴隷国民と、他方でのマルクスの言う、少数者の「偉大な資本家主人」ということになる。

またジェームズ・セットは1902年に「自由と平等」は資本主義が破壊したのだと決めつけ

#1：ジャネット『資本』、第2章：産業のもとでの資本家的生産と現代の商業、p.69 (JANNET)

#2：ホブソン『発達』1894年版、pp.4-6参照。なおマーシャルの「資本定義」は『経済学原理』1890年版、第2篇・5章「資本」参照。日本訳では第2篇・4章「所得・資本」。(HOBSON-1/ MARSHALL)

#3：ホブソン『発達』1926年版、p.2.参照

#4：マロック『階級と大衆』、p.2 (MALLOCK)

た。しかしセツトは「社会主義」云々ではなく、その「自由と平等」はもともと「レッセ・フェール」がもっていたものであってそれを謳歌していた資本主義がそれ自体を破壊したのだから、国家による介入以外には「自由と平等」を救う手立てはなく、「国有化」が現在必要になってきているという筋書きであった^{#1}。

だから、「資本主義」は、資本が利潤目的で統括している現代の生産方法で、極めて成功裏に現存しているのだと、いくら主張しても^{#2}、そのようなことは、19世紀の90年代ならまだしも、20世紀も第1次世界戦争が勃発する「帝国主義」の時期に入った段階では、最早通用しなくなっていたのであった。

バートランド・ラッセルは1916年に『社会再建の原理』を出版して、以上のような憂うべき現状の再構築を模索している^{#3}。

産業のシステムを判断するにあたっては、わたしたちが生活している次元でなのか、または改革者が提起しているものとしてなのかで、適用可能なケースは4つある：(1) 生産の極大化/ (2) 分配の公平化/ (3) 生産者の寛容な存在/ (4) 最大限の自由とヴァイタリティと進歩への刺激、このうち現代のシステムが目指しているのは第一のもので、社会主義が第二・三である。私は第四のものが最も重要だと考える。現在のシステムは減じ、そしてオーソドックスな社会主義も動揺に減じる。… (pp.119-120)

現在の資本家的システムの主要な欠陥は、賃金に対して創造的な刺激を与えるような働きかけをほとんどしないことである。… マルクス主義者が要求するような、私的資本家的企業をまったくなくしてしまうことは、まったく必要がない。大部分の人々は徐々に改革を試みている…資本主義に割り当てられるスペースは狭まってきている。人口のかなりの部分は資本主義の支配から抜け出してきているのでこれをまったく廃棄することには理由が立たない。

…国家のミリタリズムに対して多く言えることはまた経済分野の資本主義に対しても同様に言えることなのである。(pp.136-138)

ジェームズ・セツトが提起していたのと同じ次元であった。これに対してはロシア革命の後で、「私的」資本主義が自ら首を絞める「世界恐慌」の兆しが現れてくる寸前において、ペディーが『資本主義は経済的調整を伴った社会主義である』という論を著す^{#4}。1926年の時点であった。ドイツでやはりビュッヒャーが1917年の時点で同じようなことを呟いていたのであったが（後述）。

[2] ドイツでの「資本主義」

a) "capital"に対するラウの解釈

ドイツではラウが19世紀前半に "capital" というフランスでの概念をドイツ的にどのように解釈したらよいか悩んでいた。ラウはドイツ系ロシア人のシュトルヒがフランス語で1815年に発表した『経済学教程』を、ドイツ語に翻訳して『国民経済学ハンドブック』（1819年）として発表した。そこでの "capital" はドイツ的には "Erwerbstamm" であるとしていた^{#5}。既に観てきたように、1805年にゾーデンがこの「資本」概念を用いているのであるが、どちらかという一般的な産業（農業）では自然的な素材が生産の基礎にあるので、ゾーデンは商業を媒介として成り立つ「余剰生産物」の生産（採取）にあたって "Kapital=stoff" という概念を用いていた^{#6}。そしてたいていの場合、カメラリスム学問（ラウも含む）では「資本」は「貨幣」との関係で理解されていた^{#7}。

#1：セツト『倫理原則の研究』、p.285参照（SETH）

#2：アシュレイ『イングランドの経済組織』、p.173（ASHLEY）

#3：ラッセル『社会再建の原理』、第4章：「所有」、（RUSSEL）

#4：ペディー（PEDDIE…文献一覧参照）

#5：ラウ『ハンドブック』「序文（ラウ）」、S.XI「収入源」、しかし「スミス」的なものなので「産業による収入の根幹」として考えてよい。しかしラウは、その全体を指しているとは考えていない。（RAU-1 / STORCH-1）

#6：ゾーデン『国民経済学』Bd.1,SS.60～参照（SODEN）

#7：たとえばダルイエスの場合、この論文の< 1. (2) [2]>を参照。

スミスやJ.B.セイ^{#1}等の影響が色濃く表れているシュトルヒの"capital"概念は「カメラリスト」の範疇に属していたラウにとっては極めて困難な問題だった^{#2}。ラウはこの輸入概念である「資本」は、やはりゾーデンと同じく、既存の農業などの分野には入り得なく、商業が介する分野で、規模を急速に拡大できる場合に限ると考えていた。このことは1825年の『カメラリスムス学問について』のなかで述べられたし^{#3}、またラウの主著である『経済学教程』（1826年）のなかでも、規模の大きな私的企業の収益を目的とした産業の基金・素材であるとしている^{#4}。興味あることは、イギリスで1808年にジェームズ・ミルがやはり種々の税金で動きが鈍い農業などの土地経済には大資本は投下され得なく、それは貿易などに向けられるであろうということ述べている^{#5}。土地経済に「資本」が入り込むのは、土地が商品化する段階であり、その兆しとともに、ロードベルトゥスが問題提起したところであった^{#6}。

b) カール・ビュッヒャーの迷い

ビュッヒャーもまた「資本」が「国民経済」に資するのかどうか疑問を呈している。ビュッヒャーは1893年に『国民経済の成立』を発表する。経済体制は、国民経済が成立するにいたるまでに、「閉鎖的な家内経済」・「外部経済的都市経済」の段階を経て、「生活物資の流通・生産手段を手中にした国民経済」に至る。この「国民経済」では「資本」がすべてで、他のものはこれに従属しているとした^{#7}。「国民経済」段階では基本的に各人は平等で「自由主義」

(liberalism)のもとに経済活動を行っていた^{#8}。1917年の時点では、「自由主義」とともに「資本主義」が登場する、と同時に「資本」一般の支配体制が「擬制資本」のそれになり、「資本家」各人の存在は微妙になり、「資本主義」それ自体は「社会主義」的要素を付け加えている、とまで論じた^{#9}。1919年版-1922年版ではこの「社会主義」は消え、「社会化」の問題となる。と同時に今度は「帝国主義」が挿入され、これが「資本」活動の一環なのだとし、しかしこの傾向に疑問をもち、「やがて来るであろうシステム」に期待しているのであった^{#10}。

ビュッヒャーが指摘している点で重要なことは、「資本」は社会・国家を支配し、それ以外（人をも含む）がその意のままになっていくこと、さらにこのことは「資本一般」から「擬制資本」の次元になり「資本家」も不要になるようななかで、「帝国主義」がまかり通り、「資本主義」の実体・実態が示されていることを指摘したうえで、このシステムへの警鐘を鳴らしたことであった。1902年にイギリスでホブソンが『帝国主義論』を著して以来、ドイツでもルクセンブルグが1913年に副題に「帝国主義の経済的解明」というテーマをもった『資本蓄積論』を発表、1910年には「擬制資本」の実体を洗い出すために「資本主義の最新の発展の研究」というテーマでヒルファディングが『金融資本論』を著し、また1916-17年にロシアのレーニンの活動が目立ち、『帝国主義論』や『国家と革命』などが発表されたのであった。これらのことはビュッヒャーの「科学」活動に大きく影響したと思われる。

#1：スミスやJ.B.セイの著作は「文献一覧」参照（SMITH/SAY）

#2：「カメラリスト ラウ」については私の論文「ドイツカメラリスムスと経済学」、58ページ参照

#3：ラウ『カメラリスムス学問について』、S.25参照（RAU-2）

#4：ラウ『経済学教程』Bd. I. SS.51～参照（RAU-3）

#5：ジェームズ・ミル『商業擁護論』、p.115/134ページ参照（MILL James）

#6：ロードベルトゥス、前掲の『解明と方策』（RODBERTUS-I）

#7：ビュッヒャー『国民経済の成立』、1893年版、p.78参照（BUCHER）

#8：ビュッヒャー同前、1913年版、SS.139～参照

#9：ビュッヒャー同前、1917年版、SS.140～参照。（『成立』は1913年に9版が出版され、その後1917-18年に至って10版2冊本となった。）/#10：ビュッヒャー同前、参照。1922年版、SS.149～/152ページ以下

〔3〕ロシアでの「資本・資本家的生産」概念

19世紀-20世紀にかけて、ドイツやロシアの社会、そしてロシアの学問では「経済学」にあっては「資本」概念は用いられていた。しかしこの概念は、スミスやフランス学者の思想が入り込んだにしては、そのような概念としては定着してなかったようである。ロシアでは「資本家」を意味する "капиталист" のタームが、ドイツ語の "Capitalist" (19-20世紀初頭の文献ではドイツでは "Kapitalist" は外来語そのままの "Capitalist" が用いられていることが多い) からのものであった*11。

すでにみたきたようにシュトルヒは1815年にリガで『経済学教程』をフランス語で出版していた。この書物はロシア宮廷でのテキストに用いられたものであった。だからロシア人一般の書物ではなかったが、このなかでは "capitaliste" というタームは基本的に用いられている。しかしながら1826年にシュトルヒの学問思想はロシアのアカデミヤから危険視され尋問されている#1。このような事情も「資本家」概念がフランス語経由では広まらなかった原因に挙げられると思われる。そしてドイツでは19世紀の終り頃には、「資本」という概念それ自体が、マルクスの「剰余価値」概念とともに理解されていた節もあるので#2、この関係のターム、特に「資本家」概念はドイツ経由で、つまり多分『資本論』と、そのドイツ地域での階級闘争的状況のなかでの伝播の影響のもとに形成されてきたものであるということを物語っている。

これまでに「ドイツ」で考察してきたように、「資本」は巨大企業を意味し、その内容は「貨幣資本」であった。この事情はロシアでも19世紀の終り頃には確認できる。1885年12月発行の

雑誌『新時代 (HOBB)』では、国家が関与した銀行造りに際して「資本」概念が登場している#3。翌1886年1月号には、「貨幣資本」から得られる収入に対する税金を用いて政府が施設を作る話が紹介されている#4。このようなことを考えると、ロシアでは「資本」というのはまさに+Δとの関連で、「貨幣」で総括される概念だった。このようななかで、コヴァレフスキーは1898年に『資本家的経済の形成までのヨーロッパの経済成長』を発表し、土地所有者と資本家の二つの階級間の問題を、「信用」を軸にして問題提起したのであった#5。1896年に『経済学の初歩』の第3版を出版したイサエフは、次のようにこの状況について述べている#6：

最近の10年間に巨大な私的資本家的企業が形成されてきた。これらの企業は「シンジケート」をとっていて、たくさんの株式会社で形成されている。これらの企業つまりシンジケートの構成員は実際のところ独自の活動ではなくて、すべての管理を一つのまたは少数の支配者に譲り渡しているのである。

イサエフはこの「私的資本家的」という概念を、この時代の産業企業、しかも株式会社形態をとった大企業に用いている。この時代にはアメリカでのロックフェラーの巨大石油企業が話題になっていた#7。未だロシアでは「資本家的」は始まったばかりであったが、その企業が「株式」的擬制資本形態をとって発達したことが、「株式会社」という文言が各所に散見できることからわかるのである。のちにレーニンがこの「株式会社」形態による資本収奪体制の分析を『帝国主義論』で展開するが#8、イサエフが論じていた時点からわずか20年たらずである。

以上のように考えていくとロシアでは「資

#1：1829年発行のアカデミヤの『課題』(STORCH -X) - これに関しては私の論文「ドイツカメラリスムスと経済学」49ページ参照

#2：リープクネヒト『外来語辞典』(LIEBKNECHT-2/文献一覧の「辞典」)

#3：『新時代』誌、1885年12月号、c.113./#4：同前、1886年1月号、c.343. (NOV)

#5：コヴァレフスキー『資本家的経済の形成...』、「序論」、c.XIII参照 (KOVALEVSKIJ)

#6：イサエフ『経済学の初歩』、c.206. (ISAEV)

#7：イサエフ同前、同、c.207

#8：レーニン『帝国主義論』、1～3章参照 (LENIN-3)

*11：19-20世紀ロシアでの「資本」概念

本」は巨大企業のイメージであり、「株式」形態をとった資本取奪型であったことが推測できる。ドイツでも似たような状況にあった。1914年にウィーザーは『社会経済理論』を発表して、「資本」というのは「私企業」を指し、この段階では「巨大貨幣資本」の「資本家的企業」であることを明かにし、この権力が社会を動かしていることを分析していた^{#1}。

3) 「経済体制」としての「資本主義」

[1] ベーム・バヴェルクの懐疑

「資本主義」の概念を、ロツシャーは、最初には天真爛漫にのちには懐疑的に社会的なものとして考えたのであるが、それとは無関係に、その社会は「貧困」を生みだし豊かさの対極にどうしても貧困を位置付けなくてはならなかった。ロツシャーの箇所を確認したことである。そしてこの「貧困」は「社会主義」(理論・運動)を生みだした。貧困の源としての「資本主義」の否定であった。それ故に「資本主義」カテゴリーは、この体制にとっては好ましいものではなかった。ベーム・バヴェルクは1910年に「資本主義」とか「資本家的生産」を検証して、社会矛盾、過剰生産恐慌、社会体制の危機が醸成され勃発している貌はまさに、このような「資本家的～」という概念に内化されている資本運動、私的所有(私的競争)の故であると感じているし、さらに「資本主義」の概念に至っては、この概念は「非・不道徳的云々」を含めて、極めて種々のことを言い表しているの

で宜しくない概念であることを認めている。ベーム・バヴェルクも後に考察するケインズ同様、「私的～」に基づいた体制は何とかななくては(といっても「社会主義ではあり得ない!!」)と思っているのだった^{#2}。

[2] シュンペーターの動揺

1912年にシュンペーターは『経済発展の理論』という著作を発表した。そして最後の第7章に「国民経済の全貌」(Das Gesamtbild der Volkswirtschaft)を置いたが³、1926年に第2版を出版するに当たって、この「第7章」の部分を削除してしまった。問題の「第7章」の構成は次の通り^{#3}：

- * 経済学理論の2つの問題点
- * 歴史のおよび理論的發展の問題点
- * 發展に際しての「環境理論」の相互作用
- * 發展に際しての「成長理論」の相互作用
- * 経済的發展の3つの一般的命題
- * 個々の経済主体に対する發展の作用
- * 全体的社会的な經濟過程の図式
- * 生産過程に対するわれわれの調整とその若干の応用
- * 社会の經濟構造と個々人の社会的に分割された状態について
- * 資本家的經濟の社会的状況 (Die soziale Atmosphäre der kapitalistischen Wirtschaft)
- * 経済的發展の社会生活の他の分野での相似性：社会的事象

この「第7章」を削除したのは、この部分が、「文化社会学」であって、シュンペーターの主

#1：ウィーザー『社会経済理論』§56/§63参照(WIESER-1)

#2：ベーム・バヴェルク「資本」SS.783-784参照(BOHM/SCHUMPETER-2)

#3：シュンペーター『経済發展の理論』、初版、第7章参照/#4：シュンペーター同前、第2版、S.XII参照

張する「理論」からはみ出しがちであったから、という。その場合の「理論」は企業者・企業者利潤・資本・信用・利子・恐慌の主題であった。これらの主題に対して誤った見解をもっている場合にはその見解に対しては、何の合理的発言もできないというのであった^{#4}。確かに社会の矛盾がその主題から生じてきた場合にはその矛盾を圏外に置いてきたのであればそれは考察不可能である。

シュンペーターはこの「第7章」に賛意を示している中には自分の理論に反対しているものが含まれているし、反対しているものの中にはこれまでの自分の理論の支持者もいるのだ、としてこれをそのままにしておく、自分の論が成り立たなくなる、と感じたのである。初版ではこういったことに対しては、「私はむしろ、科学的精神をもって社会事象の科学的叙述に接近しうる人々の存在することを希望している」として、賛否両論がでることを予想していたのであった。しかもその中で、事態に即した何らかの真理があると評価されれば満足である、とまで言っていたのであった^{#1}。友人のベーム・パウエルクが「反対論者」の一人に入っていたということは大きかったが^{#2}、「資本家的経済」・「資本家的生産様式」そして「資本主義」というこの当時社会を階級闘争に持ち込んだ概念が、ビュッヒャの箇所で見えてきたように何か「富生産の基本」として想定してきたものがその含意したものとは異なった方向を示唆することになることは必死であった。シュンペーターは、マルクスが、資本主義は土地経済で生活してきた人々をそこから追い出して呑み込もうとしている、といったこと^{#3}に悩みながら、巨大な貨幣資本の富生産基盤の支配シ

ステムである、「資本家的生産様式」の見通しを建てようとしていたが、これは観念上の権力(Macht der Ideen)^{#4}でしかないことに気がついていたのであった。第3章・第2節「資本」では「資本家的」という経済形態を特徴づけるのに「資本」は、何か具体的な生産要素の区分したものを指すのではなくて、「基金」を指すのであり、それこそが「資本主義の現象の核」なのだとして、それに「7章」で方向性を与えるつもりだった。その方向性は「7章削除」で未確定に終り、第2版以降5の3章・第2節「資本」で、「資本=基金」を「資本主義の本質」規定の重要とするに止まった^{#5}。

この「資本家的生産様式」が醸し出した「資本主義」という概念とそれがもたらした社会構造的な問題について、フリードリヒ・ウィーザーは『社会経済理論』(1914年)や『権力法則』(1926年)で次のように問題提起していた^{#6/#7}：

我々の時代に資本家的というのは何処から生まれてきたのか、そして資本主義の本質は一体何なのか、こういう疑問を持つとき、我々はこれに対して有効な解答をもっていない。そして資本財の現象を指摘するだけということに陥ってしまうのである。というのは、資本の巨大な力はもはや資本の自然形態によっては全くのところ測ることはできない、それというのは、この資本の力はその支配下にある生産財の占有が巨大であるからである。この力は最終的な支えを貨幣形態に、特にその原初的形態である貨幣資本に持っているのである。貨幣資本、これは実質的に資本概念を把握する際の核心でありまた実際の資本力の核心でもある。巨大資本はその支配的な力を次のことを通じて行使する、つまり、個々の形態をとってくる貨幣形態によるのであり、このなかで巨大資本は所与の現象形態によって時に最強の作用をもたらすことになるのである。(『社会経済理論』)

ウィーザーは、また1926年には「資本権力」の強さを強調している。特に「軍国主義による社会の

#1：シュンペーター同前、初版、「序文」参照 (SCHUMPETER-2)

#2：シュンペーター同前、2版序文、SS.XII-XIII参照

#3：シュンペーター同前、初版、SS.478～参照

#4：シュンペーター同前、初版、S.548

#5：シュンペーター同前、初版および2版の第3章第2節を比較されたい。

#6：ウィーザー『社会経済理論』、1914年版、S.335 (WIESER-1)

#7：ウィーザー『権力の法則』、第3部「今日の権力の行方」、XVIII「現代の権力組織」E (1)「企業権力」また、XIX「今日の権力図」A:「今日の権力の危機」特にS.523を参照されたい。(WIESER-2)

支配システム」が「資本主義」と結びついているという指摘は、第1次世界戦争の綜括として重要である。（『権力法則』）

[3] ゾンバルトの定義付け

逆に経済体制的なカテゴリーとして、「資本主義」を位置付けようとしたのはゾンバルトであった。ゾンバルトは1902年以來の『近代資本主義』の中で「資本主義」タームを積極的に位置付けていった。1930年の『三つの経済学』にあっては、第2部第13章「理解」において、哲学の問題として「資本主義」を問題にした。

ゾンバルトが提起した「資本主義の哲学」は次のような構成をとる^{#1}：

「理解の種類」：「経済生活」のカテゴリー検討
経済生活が明らかになり得る形象化の種々の可能性
A 精神（経済志向）
B 形態（規制と組織化）

綜括としては個々の可能性は意味深い経済システムへと結果する。

そのシステム：

- 1 前資本家的経済システム
- 2 資本家的経済システム
- 3 資本家的なもの後に来る経済システム
(たとえば社会主義経済システム)

これら総括は種々に連関しているが、それは様式の連関としてである。この典型として経済体系が存在している。ここで問題になるのが体系としてのカテゴリーになっている「資本主義」である。これは様式連関の実在のものである。このなかでは企業家や労働者は誰であれ、資本主義の「精神」で基礎付けられている。

このように、「資本主義」概念を、経済生活上の規定的なものとして位置付けたのがゾンバルトであった。しかしこのこととは別に、「資本主義」概念は、1929-33年の世界恐慌を契機に、政治イデオロギー化して定着することになる。

3 体制イデオロギーとしての「資本主義」

1) 「社会主義」への階梯としての「資本主義」

[1] プレハノフの問題提起

「資本主義」概念が階級闘争の概念として、ドイツの「社会民主党」の出版物で用いられるようになったとは、ヒルガーの言であったが^{#2}、この間の状況の一部はこれまでに見てきたところであった。

さて、ロシアではプレハノフは1883年に体制的概念として「資本主義」（капитализм）というタームを当て、この体制が労働者階級にどのような作用をもたらすのか、社会矛盾の体系とこれからの労働者の解放との関係の問題として展開をほめていた。

プレハノフはマルクスの『資本論』を第2版で読んでいた。マルクスは初版（1867年版）「第6章資本の蓄積過程」を大幅に書き換えて「第7篇蓄積過程」として「資本家的生産様式」がどのようにして人間を階級に編成して行って、その生産様式が自己の存在のために「失業」そして「貧困」をその構成要素にして行くかを定式化した。この曝かれた「資本家的生産様式」の残虐非道性に対して抗していくべく、プレハノフはマルクスの死んだ年である1883年に『社会主義と政治闘争』を発表し、この中で基本的に「資本主義」というタームを基調にして論じている。そしてこれ以後彼の全著作にこのタームは根づいていった。プレハノフは次のようにいう^{#3}：

資本家的社会での生産物の分配法則は労働者階級にとって極度に好ましくない。しかし資本主義にとって特徴的な、生産の組織と交換形態は、まずもって、労働者解放の客観的および主観的可能性を創り出す。資本主義は労働者の世界観を拓げ、旧社会から引き継いだすべての先入観を払拭してしまうのである。

#1：ゾンバルト『三つの経済学』、SS.191-212/244-254ページ参照（SOMBART-2）

#2：ヒルガー「資本」、S.444参照（HILGER）

#3：プレハノフ『社会主義と政治闘争』、c.90（PLEKHANOV）

〔2〕ルクセンブルグやレーニンの問題提起

1893年になるとドイツ（ポーランド）でローザ・ルクセンブルグが「第3インターナショナルへの報告」の中で、そしてロシアではレーニンが1893-1907年に「資本主義」という社会体制を問題にしていたのであった。ルクセンブルグは上記の「報告」の中で、ポーランドとロシアの経済的結合関係について、そのことが「資本主義の不可避的なロジックに根ざしたものである」と述べている^{#1}。後にこの「結合関係」をルクセンブルグは1898年のチューリヒ大学での学位論文『ポーランドの産業的發展』で分析した。そこでは、マルクス『資本論』のエンゲルス編集による第3部（1895年刊行）を用いて、更に、具体的な資料に基づいて、ポーランドでも「資本主義」が体制として確立し、この資本主義体制が19世紀末のこの時点で、一国的経済圏を越えて帝国主義的な、他国への侵略的な体制をすでに成熟させたものである、と指摘している^{#2}。

この論文では'Kapitalismus'というタームは基本的に用いられている。また'polnischer Kapitalismus'（ポーランド資本主義）という規定までなされている^{#3}。特に「ポーランドとロシアの間での経済的連携」ではこのタームはしばしば用いられている^{#4}。

なお1909-12年頃に執筆されたとされる、ルクセンブルグの「マルクス経済学『講義要綱』」（『経済学入門』Einführung in die Nationalökonomieとして、ルクセンブルグの死後の1925年にレヴィによる「編集版」として刊行）では、「資本主義」の経済

がどのようなものかを図3にみるような項目の順序で論じている^{#5}：

この最後の部分（6 資本家的経済の諸傾向...1925年発行の原書では「4 資本家的...」となっている）では、ヨーロッパおよび、それ以外の地域で「資本主義」が支配してきていること、北アメリカでも資本主義が起り、資本主義が「地球化」していることについて次のように結んでいる^{#6}：

自体は明らかである。われわれがちょっとでも気がつきさえすれば、資本主義の発展が巨歩で進み、全地球上ではすべてのものが、人々によってただ単に資本家的にのみ生産されていること、つまり、近代的な賃金労働を用いた巨大企業の中で資本家的な私的な企業家によって生産されていることが判明するのである。そして同時にまた資本主義の不能性が明らかになって来るのである。

この後、ルクセンブルグは1913年に『資本蓄積論』を著し、副題を「帝国主義の経済的説明」として上記「結語」の実証を試みたのであった。なおルドルフ・ヒルファディングは1910年に『金融資本論』を著し、ドイツはもちろんその他の地域の「資本主義」を分析した。「資本主義の運動法則」とは何かをシュンペーターの分析を批判するなかで問題提起している^{#7}。

ロシアでもプレハノフがすでに1883年の時点で「資本主義」を社会体制として認識していたのであるが、レーニンもまた、1893-1907年に「資本主義」を体制概念として認識していた。

1893年にレーニンによって執筆され、しかし1937年に刊行された『いわゆる市場問題につい

図3

1 国民経済学とは何か	Was ist Nationalökonomie
2 / 3 経済史的なもの I・II	Wirtschaftsgeschichtliches I/II
4 商品生産	Die Warenproduktion
5 賃金法則	Lohngesetz
6 資本家的経済の諸傾向	Die Tendenzen der kapitalistischen Wirtschaft

#1：ルクセンブルグ「第3インターナショナルへの報告」、SS./11-12（LUXEMBURG-1）

#2：ルクセンブルグ『ポーランドの産業的發展』、SS.198-/141ページ以下、および「結語」参照（LUXEMBURG-2）

#3：ルクセンブルグ同前、S.152/67ページ参照/#4：ルクセンブルグ同前、SS.175ff.106ページ以下参照

#5：ルクセンブルグ『経済学入門』、目次、参照/#6：ルクセンブルグ同前、374ページ参照（LUXEMBURG-3）

#7：ヒルファディング『金融資本論』、1923年版、:SS.102-103n/154ページ、ここでのシュンペーターの著書は『理論経済学の本質と主要内容』である。（HILFERDING/SCHUMPETER-1）

て』では最初から「資本主義」が強調されて問題提起されている^{#1}：

わがロシアでは資本主義は発達、いや完全に発達するのだろうか。ここでは人民大衆は貧困であり、そしてますます貧困になっているのだから？

レーニンは資本主義は広大な国内市場を必要とし、そしてこの資本主義を担っていく種々のカテゴリーができあがっていきなくてはならない、として「市場問題」に取り組み始めたのであった。この「論文」はかなり後になって発表されたが、その間の1899年にウリャノフ＝レーニンの名で『ロシアにおける資本主義の発達』を発表し、副題を「強大な産業のための国内市場の形成過程」とした。そしてロシアのような、だいぶ遅れて「資本」による経済発展を始めた国が、どのようにして「資本主義」を体制化して行くのかを分析したのであった^{#2}。

ドイツ、ポーランド、そしてロシアと、資本家的生産様式が比較的後期に顕在化・体制的となる地域にあって、マルクスやエンゲルスが『資本論』などを通じて明らかにした「近代ブルジョア社会」、そしてその内容である「資本家的生産様式が支配する社会」としての定義は、「資本」による、労働者を中心とする国民の大多数に対する収奪的支配の問題として、これを廃絶して新しい社会を構築しようという「社会主義」革命闘争の過程の中で位置付けられていった。1925-6年にジードは、この「資本主義」タームが、資本による支配が優越になっていることを経済体制として特徴づけるために社会主義者が用いたのである、と言っている^{#3}。「資本主義」という概念が国民の富を豊かにする概念だとばかり思い込んでいた「ブルジョア」学者達は、この概念がまさに自分たち

の足元を崩す、「社会主義闘争概念」と知り、「資本の本性」まるだしのこの概念を拒否したというウィルヘルム・リープクネヒトの言にヒルガーは肯いている^{#4}。

「社会主義」を敵だと思い込んだ「資本主義」はしたがって「敵」を殲滅するための準備に入った。自分を「資本主義」だと思い込み始めるのだ。だから減ほされまいよう頑張る！

階級闘争は、財産所有に対する闘争だ。所有は盗まれた、そして私的な富は罪に値する。このようにして総ての経済的悪は資本主義のせいになってしまうのだ。

これは反社会主義者同盟というところが出版した『アジテートハンドブック』で1911年に出版されている^{#5}。ウェストミンスターにあったらしい。ここでは自らの制度を「資本主義」と認識しようとしているのだ。この概念はそういう意味でも「社会主義闘争概念」だったのでろう。

[3] 日本での「資本家制度」・「資本主義」

a) 堺利彦の「資本家制度」

日本では堺利彦が「資本家制度」というタームを用いている。1912年の「唯物史観」という書評上で、マルクスの『経済学批判』を紹介する翻訳語として、「近世資本家時代」とか「資本家的生産関係」・「資本家社会」という語を用いている。そして次のようにいう^{#6}

後に出でたるマルクスの大著『資本論』は、固より此學説の（近世資本家制度の發展に對する）適用である。

堺利彦の場合には、後の1919年に出版された『唯物史観の立場から』にあっても「資本家制度」というタームで一貫している^{#6}。

#1：レーニン『いわゆる市場問題について』、c3 (LENIN-1) / #2：レーニン『発達』「初版への序文」：参照 (LENIN-2)

#3：ジード：『経済学教程』tome 1,p.198-199参照 (GIDE) / #4：ヒルガー「資本」、前掲、S.444 (HILGER)

#5：『アジテート』、p.32 参照 (ANTI-SOCIALIST UNION) / #6：堺利彦『売文集』、:155-166参照 (SAKAI-1)

#6：堺利彦『唯物史観』 (SAKAI-2)

b) 日本での「資本主義」概念の訳語とその 実体設定

河上肇は1912年に「資本的生産」とは何かを論じている^{#1}

資本成立の前提条件と爲り、従て又た資本的生産の前提条件と爲るものは、一定の生活必需品の蓄積が存在すと云ふことに非ずして、眼前に逼迫せる需要以上の物の生産が可能なりと云ふことに在り。…今日の國民經濟に在りても、資本財の生産は毫も生活資料の豫め蓄積されあることを前提条件と爲すに非ず。資本の生産に従事せる労働者の生活資料は、以前より蓄積され來りし貯藏物より支給さるゝに非ずして、必要缺くべからざる生産に従事しつゝある労働者が、彼等自身の需要以上に之が生産を爲すが爲めに生ずる剰餘に依りて維持さるゝもの也。…

しかしこの段階では未だ「資本主義」の言葉は用いていない。「資本主義」を用いるのは1920年の段階で、次のように「資本主義」を位置付けている^{#2}

私が茲に個人主義の經濟學と謂ふのは、後に講述すべき社會主義の經濟學に對立せしめる意味から名付けたもので、或は資本主義 (Capitalism) の經濟學と謂つても差支ない。茲に資本主義と謂ふは、資本本位主義又は資本家本位主義と云ふ意味である。随て資本主義の經濟組織と云へば、資本の利益又は資本家の利益を本位とした經濟上の社會組織のことである。

河上肇はこの「資本主義」の場合には「利益」は社会の一部の資本家のものに過ぎず、他方には「資本を所有せざる無産者の階級がある筈である」から「資本主義」社会は階級社会であると論じた。そしてこの「資本主義」の祖国をイギリスとして、その本質は「個人主義の經濟學」にあるから、アダム・スミスの經濟學から分析するのだとした^{#4}。しかしながら河上肇は「資本主義」・「資本家的」・「資本制」を区別することなく用いている。特に1923年出版の『資本主義經濟學の發展』ではこの傾向が著しい^{#4}。

2) 「資本主義的個人主義」

1929年に世界大恐慌が起り「資本主義の危機」的状況が起き、この「危機」を救うべく、「私的資本主義」を貫徹させるために、その基本となっている「個人主義 (individualism)」をこの体制に当てはめる試みがなされた。ジョン・デューイは20世紀前半に次のように述べた^{#5}：

アメリカでは企業・資本の集積が進み、巨大企業が法人化した中で社会のマーケット支配力をその手に収め、社会全体や政府にも大きな影響を及ぼし、国家政府をも「法人化」(The United States, Incorporated) して、法人全体で社会化した状況を作りだして行くべきである。この国家=社会を構成している国民は、節約することではなくて、「買うこと」が経済的な「義務」なのである。

..産業のメカニズムはある種の生産と消費の均衡を維持することに頼っている。もしもこの均衡が妨害されれば、社会構造全体が影響を受け、繁栄とは何か意味を持たざるを得なくなるのである。資本の更新と拡大はこれまで以上に要求されている。しかしながら個人の貯蓄ではこのようにこの仕事にとっては小さく、不適当なのである。新しい資本は巨大な企業組織によって取得される剰餘によって主として供給される。そしてこのことは、消費を楽しむことを控えていることによって成り立っているような、産業における個人の買い手に話しかけるというようなことが意味がないことを語っている。「犠牲」を無くせというような古びた抗議はいまやその力を失っている。結果、個人は次のように設定されるのである：つまり自由な費消の喜びに耽ることによってその個人はその経済的義務を完遂し、そのことを通じた結果として得た剰餘収入を最も効果的に用いるコーポレート・ストアに移行させることになるのである。徳というのはいまは節欲から出発するのではないのである。

デューイのこの「新しい個人主義」なるものは「資本」の支配に人々を組み込んで、その許でのみ社会的な基本単位としての「個人」の存在を認めようというものであり、極めて恣意的なイデオロギーであった。「資本体制」が社会的なものとして、体制イデオロギー化したのであ

#1: 河上肇『經濟學研究』、229ページ。(KAWAKAMI-2)「資本」の言葉は、1907年の『經濟學上之根本觀念』で用いられている、28ページ。(KAWAKAMI-1) / #2: 河上肇『近世經濟思想史論』、2ページ(KAWAKAMI-3) / #3: 河上肇、同前、3-4ページ参照 / #4: 河上肇『發展』(KAWAKAMI-4) / #5: デューイ『新・旧個人主義』、p.44 (DEWEY)

った。

3) 体制イデオロギーとしての「資本主義」

[1] 「私的資本主義」とケインズ

私的な所有・取得の体制に基づく資本家各自の「競争社会」、「私的～」、したがって「無政府的な」競争・価格・賃金などを意味する「資本主義」は、ケインズの注目するところとなった。ケインズは「資本主義」を、マルクスが分析した当時の独占以前の資本主義に限定し、しかもその場合の「資本主義」を「個人的体制」であると限定詞をつけて用いている。この「資本主義」をケインズは1929-33年の世界恐慌の前までは、一貫して「個人主義的資本主義」として、その内容を「私的競争的資本主義 (private competitive capitalism)」あるいは「レッセ・フェール資本主義 (laissez-faire capitalism)」であるとしていた^{#1}。

このような「資本主義」の場合、市場は基本的には無政府的状态にあり、そこから一方では利子で生活する「金利生活者」がその欲望を恣にし、他方ではこの体制のもとでは「失業」がでてくる結果になるということ、そしてまた、無秩序な「競争」によって「資本」(貨幣)が無統制的に流れることが失業をもたらす原因となるのだから、このシステムを統制するような新しい社会に移行することが必要なのだと、世界恐慌を踏まえた上で、「社会主義」に色目を使いながら、新自由社会への移行を力説するのであった。

ケインズは、1920年の『平和の経済的帰結』や「貨幣の起原」に関するノートの中で、「資本主義」概念を用いる。「個人主義的資本主義」(individualistic capitalism)の意である^{#2}。そしてこの概念を「自由放任」(Laissez-faire)と結びつけて、1925年には「イギリスにおける経済的移行」を論ずる^{#3}。「資本主義」は貨幣

を愛する資本家個人個人にその貨幣を供給することを使命とした^{#4}。

経済機械の主たる動力としての貨幣を産みだし、貨幣を愛する個人的機構に強力にアピールすることに依存する、これは資本主義の基本的特徴である。

[2] 「体制イデオロギー」としての「資本主義」

1920年代前半まではケインズはこれで持ちこたえた。しかしケインズが1920年には、レーニンに対しては、その思想に対しては、基本的には資本主義の基礎を掘崩す点に観ていながらも、古代ギリシアの貴族制度を改革し、また財政改革者でもあった「ソロン」に比する称号を与えていた次元^{#5}は過ぎ去った。1929-33年の世界恐慌に観たその現実には「資本主義」を「個人的」云々で済ませるのではなくして、むしろ「体制的」な観点から見直すことを迫った。1931年の講演の中では、他の講演者が現実の社会を文明社会・商業社会・経済社会、あるいは「～国」という形だけで議論しているのに対して、ケインズは「われわれは現代資本主義の金融構造がまったく完全に崩壊するのを阻止できるのか」と呼びかけ、危機意識を体制次元で織りなしている^{#6}。

ここで特徴的なのは「生産様式」ではなくて、経済をオートマティックな貨幣供給の機械にするという形で「資本主義」が用いられていることである。その場合の「資本主義」体制の基本が「個人主義的」なものなのである。それ故に「市場」が無政府的になっていて、貨幣(賃金・資本)の流通が統制がとれず、物価が上昇する傾向を示し、賃金が上昇することになるというのであった。

このような「個人的」組織状態にあっては、「資本家」は「金利生活者」であって、この「金利生活者」が全てを支配するところとなって、

#1 : ケインズ、JMK Vol.XXI, pp.139-240、また『平和の経済的帰結』<1>、p.235 ~ 参照 (KEYNES-1)

#2 : ケインズ[ケインズと古代通貨]JMK Vol.XXVIII, p.253 (KEYNES-2)

#3 : ケインズ、JMK Vol.19, pp.438-439 (KEYNES-6) / #4 : ケインズ: レッセ・フェール、p.50 (KEYNES-7)

#5 : ケインズ、JMK XXVIII, p.227 (「ソロン」に関しては私の『労働と所有』、122ページ以下を参照)

#6 : ケインズ「ハレー・ステュアート講座での講義」、1932, p.57 (KEYNES-10)

異端な「コーラン」的存在の『資本論』の「予言」する「失業」は避けられなくなる。そこで社会は大きな危機を迎え「共産主義」の攻撃するところとなる。これを阻止するためには「個人的」つまり「個人主義」の原則をやめて、「新しい自由主義の真の天命」になるような社会に移行が行われるのを信ずるより他はないのだ、とケインズは主張するのであった^{#1}。

ここには「キリスト教の倫理」観に支配された、「宗教」としてのキリスト教的偏見が入り込み、ユダヤ系のマルクスが著した『資本論』を、それ故に異端的「コーラン」に擬している。これは『資本論』を宗教裁判的に「禁書」扱いにして、そこで問題になっている「資本家的生産様式」が醸しだす現実の姿を問題にすることを極力避けようとしたことを意味している^{#2}。

1940年ともなれば、「資本主義」は体制概念となって、ケインズは、「資本主義的民主主義」(capitalist democracy)をどのようにして維持していくか、という議論をしだすのであった^{#3}。

[3] 「戦争」を経済機構の中に組み込んだ「体制資本主義」

資本家的生産様式が発達をし、独占体の形成が進んできた19世紀の後半以降には株式会社

形態による資本調達機構、そのマーケットの形成が進み、1917年にレーニンが分析した「金融寡頭制」が支配的な形態になってくる^{#4}。そして1929-33年にはアメリカをその発信地とした「世界恐慌」が世界を覆う。アメリカでは恐慌状態は一応鎮静化するが1937/38年には「中間恐慌」というような事態が勃発し^{#5}、これを克服すべく、ケインズが「資本主義」を民主主義的になどと考えている矢先の1941年に、今度は「戦争」という手段でこの恐慌に立ち向かう。もっともケインズも1936年の時点では、すでに「戦争」をも強大なマーケット問題として想定していた^{#6}：

非自発的な失業が存在する時、労働の限界的な不効用性は限界生産物の効用性よりも必ず小さい。もっとも小さいと言える。というのは長期間失業していた人にとっては、ある程度の労働は負の効用どころか正の効用を持つかもしれないのである。もしこれが期待し得るなら、いま議論してきた、「浪費的な」公債支出も、それにもかかわらず、バランス上はコミュニティを富ませることになるのだ。ピラミッド建設、地震、戦争でさえも富を増加させるのに役立ち得るのである。ただし、古典派経済学の原理に則った我等の政治家たちの教養次第だが。

1929-33年の恐慌は上述したように1937/38年に「中間恐慌」に見舞われるが、1941年には完全に克服される。アメリカの「合同経済委員

#1：ケインズ JMK Vol.XIX,pp.438-439/ XXI,p.239 (KEYNES-6/-10) 『一般理論』、p.376;F,184ページ/ XXVI,p.33など参照 (KEYNES-13/-15)

#2：ケインズ「バーナード・ショーへの返答」JMK XXVIII,pp.32-33/ p.38 (KEYNES-12)

#3：ケインズ JMK XXII,p.149 (KEYNES-14)

#4：レーニン『帝国主義論』、第3章参照 (LENIN-3)

#5：クチンスキー『資本主義の歴史についての研究』1957/ ワグナー「資本主義の全般的危機の最初の二つの段階におけるUSAでの工業生産の循環的過剰生産恐慌-1914-1958」参照 (KUCZYNSKI/ WAGNER)

#6：ケインズ:『一般理論』 pp.128-9参照

会」は1957年の時点で、次のように述べた^{#1}/^{*12}：

1940年の最後の四半期に開始された、安全保障のための支出が巨大な規模で増大してきたことが、30年代の長い不況を最終的に終わらせ、経済を1942年中期までの最高潮期に入れ込み、ほぼ戦争終了期まで高度に力を加えられた進展を維持させることができたということは、ほとんど疑いの余地はない。

上の「戦争関係」の内容をグローモフはアメリカ政府の公式統計から計算して示した^{#2}。簡単に数字を挙げてみる。グローモフはアメリカの「最終生産額」に占める「軍需」の割合^{*13}を次の「表1」で示している（詳細は[註釈]の(*13)参照)：

最終生産物と「軍需」は1929年を基点として、それぞれ「表2」にみるような趨勢であった：

1942年時は第2次世界戦争関係での「軍需」の膨らみであるが、1957/8:1960/61年時は「恐慌」時であり、1929年時の「軍需」規模とは較べにならない程に膨らんでいるのが判明する。そこでこの「軍需」の最終生産物に占める割合を、「表1」でみてみると次のようになる：

1942年次を別にして、「恐慌」対策として「軍需」は最終生産物に対して3-4パーセントを占めることが示されているのである。「恐慌」時以外にもこの割合は恒常化してきている。ケイ

ンズが隠し弾にもっていた「軍需」という強大なマーケットが恐慌を癒したのであった。アメリカの資本主義は1929-33恐慌の1941年での「克服」という事態経験に鑑み、第二次世界戦争前までは、軍需産業は存在していなかったのに、戦争後は恒常的な軍需産業を創造し^{#3}「戦争」を経済機構の中に取り込んだ^{#4}。アメリカの「工業統計表」には「ミサイル工業」という項目が「輸送機械器具産業」の一部として少なくとも1963-1972年位までは存在していた。そして「商務省」発行の「資料」には「軍需産業」("Defense-Oriented Industries"また"Defense-Intensive Industries")というのが加わっていた^{#5}。これは強力な「軍産複合体」(Military-Industrial Complex)であって、M I Fという大統領をトップに国防相と企業経営者から成る複合運営体によって運営されていた^{#6}。この結果は、軍人出身の大統領であったアイゼンハウワーに「自由」や「民主的手続」に脅威を与え兼ねない状態にまでなっている、と言わせている^{#7}。

1980年の時点でも、この軍需産業の存在はグローモフの上記の分析結果を立証している。アメリカ議会の調査によれば、「軍需用購入」が全産業に占める割合は、3.2%だった。この割合は、「工業製品」中では高くなる。同じ資料に

表1：「アメリカの最終生産物に占める軍需の割合」

	1929	1938	1941	1942	1957/58	1960/61
最終生産物：	100	100	100	100	恐慌時	不況時
国家調達による生産設備	0.3	0.3	1.3	3.4	1.1	1-1.1
軍事建設	0.0	0.1	1.8	4.5	0.4	0.3
軍事技術	0.2	0.7	3.2	13.1	3.6	3.3-3.4

#1：『経済成長および安定に向けての連邦政府財政支出政策』、p.527 (JOINT ECONOMIC COMMITTEE)

#2：グローモフ『USAの最終消費生産物の再生産』、cc.208-9;また「付録」(cc316～)の諸表を参照 (GROMOW)

#3：アイゼンハウワー「火炎りに遭っている自由」『超帝国』p.31 (EISENHOWER)

#4：エルスナー『恐慌研究の問題点』S.17、参照 (OELSSNER)

#5：参照：アメリカ商務省『軍需産業の出荷額』各年版/アメリカ議会『軍事支出と経済』(US Department of Commerce / Congress of the US)

#6：ゴール『軍産企業』、pp.52以下 (GOGOL) / #7：アイゼンハウワー 同前、pp.31-32

*12：アメリカ「合同経済委員会」が掲げた「戦争関係費用」の「連邦年平均支出」に占める割合の表

*13：USA「最終生産物生産額」に占める「軍需」の割合

表2：「1929年に比した軍需の伸率」

	1938	1941	1942	1957/58	1960/61
				恐慌時	不況時
最終生産物：	0.9倍	1.4倍	1.5倍	2倍超	2.4倍
国家調達による生産設備	1.0	約7	約20	約10	7～9
軍事建設	3.5	約8	約22	約26	約26
軍事技術	2.6	約19	約82	約34	約32～3

よれば、1948－1980年間の平均で4.1%を「軍需産業」の生産が占めていた^{#1}。以上のことを資本主義のシステム問題として明かにしていく観点から、メルマンは1970年に『ペンタゴン資本主義』を著し、1974年にはこの資本主義を「戦争を埋め込んだ経済」体制としたのであった^{#2}。

現在ではこの「軍事的資本主義」は自ら自分の行為以外は認めないと宣言して地球支配に乗り出している。アメリカは公然と「資本主義の精神」は「キリスト教の倫理」にしか適合しないのだといわんばかりに、自分のところの宗

教以外は排除する方向に乗りだしている。軍の学校では「イスラムを攻撃してもよい」という教科書が作成されて、その講義がなされてきた。そしてこういった「非キリスト教」的な地域（日本を含む）を、これまでに核兵器などを用いて、大量爆撃・破壊・大量殺人をしてきた行為を正当化してきている^{#3}。

#1：アメリカ議会資料、同前,p.13:第4表/p.15:第5表参照（Congress of the US）

#2：メルマン『恒常的戦争経済』（MELMAN-2）

#3：『朝日新聞』2012/05/18「イスラム市民を攻撃可能」、参照（「文献一覧」：「資料」）

〔註釈〕

*01：“The Tenants in capite”: SUFFOLKでの例『ドムズデイ・ブック』では、土地の所有者・管理者別に記述してある（pp.1186-1301）。これをエリスが整理して分析しているので、ここではエリスによった:

** “Tenants in capite = Tenants in chief” [タイトルおよび p.45]

** SUFFOLK: Tenants in capite...74

*** The Vavassores Regis, who form the 74th head of lands in capite, Suff. foll.466,446b.447, in the individual entries are called "Liberal Homines", without mention of their name; their total is 56, and is added to their class in the present Abstract. (Vol.2 p.488) (DOMESDAY)

*02:『マグナ・カルタ』での「個人的資産 = capitali (s)」
"capitali (s)" はラテン語なので、ラテン語の原文とその日本語訳を示しておく（ローマ数字は条文の番号である）:

II. Si quis comitum vel baronum nostrorum, sive aliorum tenentium de nobis in capite

perservitium militare,

原語 tenens iu capite は英訳では "tenant in chief" であり王が直接に受封している者をいう。(20ページ)
IX. Nec nos nec ballivi nostri seisiemus terram aliquam nec redditum pro debito aliquo, quamdiu catalla debitoris sufficiunt ad debitum reddendum; nec plegii ipsius debitoris distringantur ipse capitalis debitor sufficit ad solutionem debiti; et si capitalis debitor defecerit in solutione debiti, non habens unde solvat, olegii respondeant de debito; et, si voluerint, habeant terras et redditus debitoris, donec sit eis satisfactum de debito, quod ante pro eo solverint, nisi capitalis debitor monstraverit se esse quietum inde versus eosdem plegios.

朕も朕の代官も、債務者の動産が債務の弁済に十分なかぎり、彼のいかなる債務についても、そのいかなる土地も地代も差押えないだろう。また、主たる債務者自身が、債務の弁済に十分なるかぎり、当該債務者の保証人達が、差押えを掛けられることはないものとす。而して、若し主たる債務者が、弁済にあてるべき財産がなくて、債務の弁済をなし得ない場合には、保証人達が、その債務について責任

を負うべきものとす。而して、保証人達は、若し彼らに、その意志があれば、彼らが先に債務者に代わって弁済した債務について補償を受けるまで、その債務者の土地及び地代を保有することができる。ただし、主たる債務者が、当該保証人に対して、自分は、その点では、免責せられることを示した場合には、この限りでない。(37-39)

"capitali":

XLI. Omnes mercantores habeant saluum et securum exire de Anglia, et venire in Angliam, et morari, et ire per Angliam, tam per terram quam per aquam, ad emendum et vendendum, sine omnibus malis tollis, per antiquas et rectas consuetudines, preterquam in tempore gwerre, et si sint de terra contra nos gwerrina; et si tales inueniantur in terra nostra in principio gwerre, at tachiennitur sine dampno corporum et rerum, donec sciatur a nobis vel capitali iusticiario nostro quomodo mercatores terre nostre tractentur, qui tunc inueniuntur in terra contra nos gwerrina; et si nostri salui sint ibi, alii salui sint in terra nostra. (HOLT, 2, pp.461-2)

すべての商人は、あらゆる悪料なく、古来の正しい慣習によって、売買のため、陸路によると海路によると問わず、安全に、心配なく、イングランドを出ることも、イングランドへ来ることも、イングランドに滞在し、イングランド中を旅行することができる。ただし、戦時において、且つ彼らが、朕に対して戦争状態にある国の者なるときは、このかぎりでない。而して、若しこのような者共が、戦争の初頭において、朕の王国内に見出されることがあれば、彼らは、朕なり朕の最高裁判官なりが、朕に対し戦争状態にある国内で、その当時見出される朕の国の商人共が、どのように取扱われているかを知るにいたる迄、その身体及び財産に対する損害を受けることなく、抑留されるものとする。而して、若し朕の国の国人達が、かしこにおいて安全であるならば、[この] 他の [国の] 者達は、朕の王国内においても、安全であるべきものとす。(95-97ページ)

MAGNA CARTA

- 1 田中秀央『羅和対訳 マーグナ・カルタ MAGNA CARTA』[ローマ数字は条文]
- 2 HOLT James Clarke MAGNA CARTA. Second Edition.

*03: "pig"と商取引

「家畜」が商取引の対象となっていたことに関して、OEDが "Pig"について説明をしているので、それ

を掲げておく: OED (Shorter)

I. The young of swine; The figure of the animal used as an ornament, etc.

II. Technical uses: An oblong mass of metal, as obtained from the smelting-furnace; esp. of iron. Also, in mod. use (without a or pl.), short for *pig-iron*.

* Phrases.

To buy a pig in a poke (or bag), to buy a thing without seeing it or knowing its value.

Please the pigs, if all's well.

To carry pigs to market, to try to do business or attain to results.

To drive (or bring) one's pigs to a fine, pretty, etc. market.

(usu. ironical) to be unsuccessful in a venture.

このように「家畜」(ここでは「豚」)が商取引されるなかで、次第にその固有の形態などは社会的平均(常識化)の観点から問題にならなくなり、そこでの結果(産物)を予測するために形容詞化して「状態語」化していったのであり、それさえ頭数的に(capt)数化していったことが伺われる。テュルゴも『富に関する省察』のなかで、「資本蓄積」に際して、貨幣以前の富の再生産システムとして「生きたもの」(奴隷を含む)を位置づけしていた(日本語訳本の第49節~57節を参照-なお第50節は「動的富。資本の蓄積」となっているが、デュボン原文は§.LII. "Richesses mobilières, amas d'argent"となっていて、ミークの訳も "Movable wealth; accumulation of money"となっていてことに留意されたい)。テュルゴが家畜の商取引を需要視していたことに関しては、デーキン(DAKIN): *TURGOT*を参照されたい。

*04: "live-stock"と「貨幣」・「資本」

ジェヴォンズは『貨幣と交換のメカニズム』(初版は1875年、ここでは彼の死(1882年)後の1920年版)で、古代ドイツでの罰則が "live-stock" で賄われたこと、また貨幣が存在しない時代には医者への支払いが家畜でおこなわれたことを紹介し、家畜を頭数で表すことが "capitale" となり、"capital" になっていったことを述べている (p.23)。またマクロードも "cattle=capitale" を「富」の内容との関わりで1872年の時点で、そして歴史としても確認できるとしている。

J E V O N S : *M o n e y*, 1 8 8 2 - 1 9 2 0 , p . 2 3 ;
M A C L E O D : *E c o n o m i c a l P h i l o s o p h y*, 1 8 7 2 , p . 2 2 6 /
H i s t o r y, 1 8 9 6 , p p . 2 2 5 - 2 2 8 .

*05: ゴーデンの「資本的生産」について-ヒルガーの整理

ヒルガーはドイツ地域で最初に「資本家的生産」を問題にしたのはゴーデンであること、しかしそれはアダム・スミスのエピゴーネンに過ぎないと述べた。しかしゴーデンの論理を追っていくと、富の再生産のシステムのことを「資本」を用いて説明していること、さらにこの「再生産」には富の生産者の生活の再生産が係わっていることが読み取れる。

なお、ヒルガーはゴーデンの「資本」規定が1815年になされたとしているが、それは1805年の間違いである。ヒルガー「資本 資本家 資本主義」,1982年,S.419. (SODEN/ HILGER 文献一覧参照)

*06: シーニョア:「イギリスの救貧法」

シーニョアは1841年に『エディンバラレビュー』10月号に「イギリスの救貧法」という論文を執筆して、マルサスがくさしていた点を縷々展開している、参照:『歴史・哲学的エッセイ』Vol. 2,第4章, (SENIOR)

「貧困悪癖説」の問題に関しては、わたしが『経世済民論と経済学』で扱ったので、その,185-188^o-ジを参照されたい。

*07: ニコルスの『イギリスの救貧法史』の基本的性格

ニコルスは1860年に『イギリスの救貧法史』を全2巻で出版した。1834年の「救貧法」に関して見てみると、それ以前の「救貧法」によって貧困を社会から取り除く費用は莫大なものになってきていることを強調している (Vol. II, pp226-227)。この点はマルサスなどの論に繋がるものである。この「貧困」がどのようにして形成されてきたものなのかが不問に付されたまま、費用が高むことだけしか見えなければ、こういった「法」は「ブルジョアジー」に享樂的生活をさせないような、「非常識」なものなので、これは廃止する運命にしかないはずである。だからマルサスは「救貧法」は廃止されるべきであると述べたのであったし、またニコルスも同じなのであった (『人口論』第2版: 第4編, VII章 救貧法の漸次的廃止に関するプラン: 第3版以後は, VIII章/ またノット『人民の抵抗』, p.42参照)。

これに対して、ニコルスの『救貧法史』の補完としてVol. III.を編纂したマッケイは、この問題であった1834年の救貧法からの歴史として、ニコルスのやり方を批判する形で (表立ってはいないが)、「貧困」がどうして起るのか、産業の急速な発達と都市への農村からの流入人口の拡大の問題を指摘して、「資本は自由に移動できるが、労働はそれが稼働するように設定された箇所に関じ込められてしまうのである」と述べている (参照: pp.1-18)。なお1834年の「救貧法」の策定

過程で、マルサスやシーニョアなどがどのようにして関与していったのかに関しては、ローズ『イギリスの救貧法 1780-1930』(1971年)、そしてブルンデージ:『1832-39年の新救貧法の策定』(1978年)やノット『1834年の救貧法への民衆の反抗』が詳しく論述している。NICHOLLS (MACKAY) / KNOTT / ROSE / BRUNDAGE

*08: 『経済学批判』と『資本論』(第1部) 冒頭の文章

* Zur Kritik der Politischen Oekonomie, 1859. Erster Abschnitt. Das Kapital im Allgemeinen. Erstes Kapitel. Die Waare.

Auf den ersten Blick erscheint der bürgerliche Reichthum als eine ungeheure Waarensammlung, die einzelne Waare als sein elementarisches Dasein. Jede Waare aber stellt sich dar unter dem doppelten Gesichtspunkt von Gebrauchswert und Tauschwert h. (Kautsky ed. S.1. 隔字体はマルクス)

* Das Kapital. Bd.1.1867.

Erstes Buch. Der Produktionsprozess des Kapitals. Erstes Kapitel. Waare und Geld. 1) Die Waare.

Der Reichthum der Gesellschaften, in welchen kapitalistische Produktionsweise herrscht, erscheint als eine "ungeheure Waarensammlung" # , die einzelne Waare als seine Elementar-form. Unsere Untersuchung beginnt daher mit der Analyse der Waare.

Karl Marx: "Zur Kritik der Politischen Oekonomie, Berlin 1859", p.4. (S.1...隔字体はマルクス)

*09: エンゲルスの死 (1895) までの『資本論』の刊行の歴史

(1): マルクス・エンゲルスによる『資本論』の刊行 1867 Das Kapital. Buch I. Hamburg. Verlag von Otto Meissner.

1872 Das Kapital. Buch I. Zweite verbesserte Auflage. Hamburg. Meissner.

1872-75 Le Capital. Traduction de M J.Roy, entièrement revisé par l'Auteur. Paris. Editeurs, Maurice Lach treet Cie.

1883 Das Kapital. Buch I. Dritte vermehrte Auflage. Hamburg. Meissner.

1885 Das Kapital. Buch II. Hamburg. Verlag von Otto Meissner.

1887 Capital. A Critical Analysis of Capital

Production. Translated from the third German edition by Samuel MOORE and Edward AVELING. And edited by Frederick ENGELS. 2 Vols.

London: Swan Sonnenschein, Lowrey, & Co., 1887.

1894 *Das Kapital*. Buch III. Hamburg. Verlag von Otto Meissner.

(2): 『資本論』の各国版出版の状況

ウーロエヴァは『『資本論』の1867-1895年間の出版』の表を掲げている:

出版	巻			備考
	I	II	III	
ドイツ版	4	2	1	
ロシア版	1	1	1	III : 1896
フランス版	2	-	-	
ポーランド版	1	-	-	
デンマーク版	1	1	-	
イタリア版	1	-	-	
スペイン版	1	-	-	
イギリス版	5	-	-	
オランダ版	1	-	-	
	18 ^(#7)	4	2	

У Р О Е В А. Книга. Живущая Веках. с.7/242ページ)

日本語版(原本の2版の翻訳)で1部追加した。(UROEVA)

*10: "Kapitalverhältnisse" の "capitalism" 解釈

マルクスの『直接的生産の諸結果』の中に次の文章がある:

Die Selbstverwertung des Kapitals -- die Schöpfung von Mehrwert -- ist also der bestimmende, beherrschende und übergreifende Zweck des Kapitalisten, der absolute Trieb und Inhalt seines Tuns, in der Tat nur der rationalisierte Trieb und Zweck des Schatzbildners, -- ein durchaus armseliger und abstrakter Inhalt, der den Kapitalisten von einer andern Seite ganz ebenso sehr unter der Knechtschaft *des Kapitalverhältnisses* erscheinen lässt, wenn auch von anderer Seite her, auf dem entgegengesetzten Pol, als den Arbeiter. (1969ed/ S.18)

文章中で私(阿部)がイタリック体で示した「資本(諸)関係」の部分で「資本主義」と訳をしたのが次の文献である。この段落の全体を示しておこう:

The self-valorization of capital--the creation of surplus-value--is therefore the determining, dominating and overriding purpose of the capitalist; it is the absolute motive and content of

his activity. And in fact it is no more than the rationalized motive and aim of the hoarder -- a highly impoverished and abstract content which makes it plain that the capitalist is just as enslaved by *the relationships of capitalism* as his opposite pole, the worker, albeit in a quite different manner.

Karl Marx CAPITAL Volume 1, Penguin Books. p.990.

*11: 19-20世紀ロシアでの「資本」概念

次に掲げるのはこの時期の「辞典」からのものである:

<19世紀末から20世紀はじめのドイツ・ロシアの「資本主義」語彙>

1-1.ドイツ: リーブクネヒトが編纂した『国民外来語辞典』(初版:1874年。日本での翻訳名は「外来獨逸語辞典」)(#1)

Kapital: マルクスによる剰余価値を生む価値であって、これは資本家的社会制度に固有の意味であって、決して国民経済学が人間の欲望を充足すると主張しているようなものではない。

「資本主義」のタームは第20版-1929年版でも収録されていない。

1-2.ドイツ: バンロシエ編纂『ドイツ語類似語辞典』(3-me d.1930)(#2)

Kapital: 貨幣総額/ totes Kapital: 利子を産まない/ 以下単語のみ-Kapitalismus / Kapitalist/ kapitalisieren
2. またこの時期のロシアで編纂された外来語辞典やドイツ語-ロシア語の辞典でも取り上げられているのは次のものだけである:

* 1891年発行のレンストゥレム編纂『ドイツ-ロシア語/ロシア-ドイツ語辞典』(#3)

Капиталистъ, -листка: Capitalist/C-in

Капиталь: Capital

Капитальный: Capital-

Capital: капитал; (Geld) деньги;

(Reichthum) богатство;

(Grundvermögen) имущество

Capitalisieren/ Capitalist..

(ロシア-ドイツ語, c.179 / ドイツ-ロシア語, c.153 参照)

* 1894年、チュディノフ編纂の『外来語辞典』(#4)

Капитализация (фр. capitalisation отъ capital) 資本化, 企業販売

Капитализировать (фр.) 資本化する

Капиталистъ (нѣм. Capitalist, отъ лат. capitalis-капиталь) 著しく資本を占有している人

*12：アメリカ「合同経済委員会」が掲げた「戦争関係費用」の「連邦年平均支出」に占める割合の表

期間	連邦年平均支出 (\$Mill-a)	戦争関係年平均支出 (\$Mill-b)	戦争関係費用の比重 (a/b %)
1926-30	3,183	1,707	53.6
1931-35	5,215	1,792	34.4
1936-40	8,192	2,661	30.8
1941-45	64,038	52,415	81.8

〔「経済成長および安定に向けての連邦政府財政支出政策」p.512〕

Капиталь (лат. capitalis) .

- 1) 利殖を目的とした貨幣量
- 2) 自分の利用のためあるいは何らかの生産の目的で用いる全資産

リープクネヒトの場合には「社会主義者」のレッテルが貼られているので、その世界のこと！と見る節もあるかもしれない。しかし彼の立場でも「資本主義」は未だ「政治語」であって「辞典」的なものではないとの認識があったものと思われる。しかし同じ頃、いや彼の死後の世界であるが（リープクネヒトは1900

年に死亡している）、フランスで編纂された『ドイツ語類似語辞典』の場合には、ある意味では更にショッキングなことが語られているのである。「資本主義」概念が採譜されているのは頷けるが、「資本」の説明になると、「貨幣」そのものであるし、明確に「利子」との関係で「資本」が語られているのである。「1930年」にである！

#1: リープクネヒト『外来獨逸語辞典』（SS.235-6参照）（LIEBKNECHT <2>）

#2: パンロシエ編纂『ドイツ語類似語辞典』（3-me

*13：USA「最終生産額」に占める「軍需」の割合: グローモフの計算による1947-49年の価格での計算表: 単位は,\$Mill.

[生産額価値額]

	1929	1938	1941	1942	1951	1957	1958	1960	1961	1962
I 生産手段	22,245	12,221	28,510	26,398	44,155	39,865	32,289	38,154	38,165	41,855
1 生産設備	8,847	5,878	12,113	11,731	22,554	21,708	17,378	19,346	18,786	20,674
a) 国家調達	307	306	2,280	6,047	5,617	3,251	2,780	2,344	3,025	2,867
2 生産建設	11,148	7,480	10,360	10,343	12,990	17,113	16,210	17,280	17,871	18,319
II 非生産的消費	93,079	93,451	128,698	148,966	174,371	218,152	218,699	237,424	238,885	251,479
a) 軍事建設	37	131	3,063	7,979	788	955	1,028	986	958	866
b) 軍事技術	277	734	5,382	22,905	5,282	9,443	9,349	9,130	9,637	9,857
III 最終生産物	116,570	107,842	169,187	175,042	220,596	262,195	252,036	277,988	280,378	296,508

[最終生産物価値に占める各項目の比率 (%)]

	1929	1938	1941	1942	1951	1957	1958	1960	1961	1962
I	19.1	11.3	16.8	15.1	20.0	15.2	12.8	13.7	13.6	14.1
1	7.6	5.4	7.1	6.7	10.2	8.3	6.9	6.9	6.7	7.0
a)	0.3	0.3	1.3	3.4	2.5	1.2	1.1	0.8	1.1	1.0
2	9.6	6.9	6.0	5.9	5.9	6.5	6.4	6.2	6.4	6.2
II	79.8	86.6	76.1	85.1	79.0	83.2	86.8	85.4	85.2	84.8
a)	0.0	0.1	1.8	4.5	0.3	0.4	0.4	0.3	0.3	0.3
b)	0.2	0.7	3.2	13.1	2.4	3.6	3.7	3.3	3.4	3.3
III	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

[1929年を100とした場合の各項目の倍率 (%)]

	1929	1938	1941	1942	1951	1957	1958	1960	1961	1962
I	100	54.9	128.2	118.7	198.5	179.2	145.1	171.5	171.6	188.1
1	100	66.4	136.9	132.6	254.9	245.4	196.4	218.7	212.3	233.7
a)	100	99.6	742.7	1969.7	1829.6	1058.9	905.5	763.5	985.3	933.9
2	100	67.1	92.9	92.8	116.5	153.5	145.4	155.0	160.3	164.3
II	100	100.4	138.3	160.0	187.3	234.4	235.0	255.1	256.6	270.2
a)	100	354.0	8278.4	21565	2129.7	2581.1	2778.4	2664.9	2589.2	2340.5
b)	100	265.0	1943.0	8268.9	1906.8	3409.0	3375.1	3296.0	3479.1	3558.5
III	100	92.5	145.1	150.2	189.2	224.9	216.2	238.5	240.5	254.4

（グローモフ「USAの最終消費生産物の再生産」,「付録」(cc344～)の表による...統計の原資料は以下のものが主である:

US Department of Commerce: National Income, 1954. US Income and Output, 1958. Survey of Current Business, etc., (GROMOW)

d.1930,S.354) (PINLOCHE)

#3: レンストウレム 編纂『ロシア-ドイツ語辞典』
(LENSTROEM)

#4: チュディノフ『外来語辞典』: c.367

φ p: フランス語/ нѣм: ドイツ語/ лат: ラテン語
(CHUDINOV)

[文献一覧] 著者名順 (アルファベット)

凡例:

- 1 著者名順 (ラテン・アルファベット): 最初に検索を兼ねたラテン文字のアルファベット, 次に固有文字での著者名、そして可能な限り著者の生涯年を記載した。
- 2* *版: 翻訳: -tj: 日本語訳/ -te: english/ td: deutsch/ -tf: fran aise など;
[1957]/1978: 原本刊行年は1957年であり, []は未見で, ここでの参照は1967年版

ABE Hiroshi, 阿部弘, 1942-

- 1 『労働と所有- 経済学の出発』, 八千代出版, 東京, 1983.
- 2 「急進派 Radicals」・「ミル, ジェイムズ」, 木村正俊・中尾正史 (編), 『スコットランド文化事典』, 原書房, 東京, 2006, 所収
- 3 『経世済民論と経済学』, 創成社, 東京, 2010
- 4 「ドイツカメラリスムスと経済学」, 駒澤大学経済学会『経済学論集』, Vol.44-1, 2012.09

ANTI-SOCIALIST UNION

- 1 *Speakers' Handbook*. Anti-Socialist Union of Great Britain. Westminster. 1911.

ASHLEY William James, 1860-1927..

- 1 *The Economic Organisation of England*. An Outline History. Lectures Delivered at Hamburg. Longmans, Green and Co., London. 1914.

BASTIAT, Frédéric, 1801-50

- 1 *Harmonies Economiques*. [1850]
- 2 2e dition, augmentée des manuscrits laissés par l'auteur.
Publiée par la Société des amis de Bastiat.
Paris, Guillaumin et Cie, Libraires, 1851

BECHER, Johann Joachim, 1635-1682.

- 1 *Politischer* Discurs. Von den eigentlichen Ursachen/de Auf=und Abnehmens/ der Staedt/Laender und Repub-icken/ in specie. Wie ein Land Volkreich und Nahrhaft zu machen/ und in eine rechte Societatem civilem zu bringen. Auf wird von dem

Bauern=Handwercks und Kaufmannsstand/ derer Handel und Wandel/item Von dem Monopolio, Polypolio und Propolio, von algemeinen Land. Magazinen/ Niederlagen/ Kaufhaeusern/ Montibus pieratis, Zucht=und Werckhaeusern/ Wechselbaencken und dergleichen/ au fuerlich gehandelt. Calvin, in Lex. Jurid. Publice interesse ducitur, quod in commune expedit, & ad totius reipublica utilitatem spectat, licet qua ad omnes pertinent, plerumq; singulis negligentur.
Franckfurt/ In Verlegung Johann David Zunners/ Anno Christi. [M DC LXVIII (1668)]
-r <Klassiker>, 1990.

BLANC Louis, 1811-1882.

- 1 *Le Nouveau Monde*. Journal Historique et Politique, rédigé par Louis Blanc. Bureau d'Abonnement, Paris.

[駒澤大学図書館所蔵]

Num ro	1.	15 Juillet	
	2.	15 Août	
	3.	Septembre	
	4.	15 Octobre	
	5.	15 Novembre	
	6.	15 Décembre	
	7.	15 Janvier	
	8.	15 Février	: Le Crédit.
	9.	15 Mars	-----

* 2e année.

1. 15 Juillet 1850.

- 2 *Organisation du Travail*. Paris, au Bureau du nouveau Monde. 1850. [駒澤大学図書館所蔵]

-tj 浅野研真『労働の組織』, 社会思想全集 第三卷「ロバート・オーエン 社会に就ての新見解/ルイ・ブラン 労働の組織」, 平凡社, 東京, 1932.

[駒澤大学図書館所蔵]

BOHM, BÖHM-BAWERK Eugen von, 1851-1914.

- 1 "Kapital", *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*. Dritte Ausgabe. Band V. Jena Verlag Von Gustav Fischer. 1910. (SS.777-785)

BRUNDAGE Anthony.

- 1 *The Making of the New Poor Law*. The politics of inquiry, enactment and implementation. 1832-39

Hutchinson & Co. London. 1978

BUCHER K, B CHER Karl,1847-1930.

- 1 *Die Entstehung der Volkswirtschaft*. Vorträge und Versuche.
Verlag der H.Laupp'schen Buchhandlung, Tübingen, 1893. [一橋大学メンガー文庫]
- tf *Etudes d'Histoire et d'Economie Politique*. Traduites par Alfred HANSAY.Avec une Préface de Henri PIRENNE Bruxelles. Henri Lamertin, Editeur./ Paris. Felix Alcan, Editeur.1901. [早稲田大学図書館所蔵]
- 2 stark verm. Aufl.Tübingen:H.Laupp,1898. [早稲田大学図書館所蔵]
- 3 3-er stark verm. und verb. Aufl.1901.Tübingen : Verlag der H. Laupp'schen Buchhandlung. [早稲田大学図書館所蔵]
- 3te *Industrial Revolution*. Translated from the third German Edition by S.Morley Wickett. [1901]
- 3te-r Reprinted 1968 by Augustus M.Kelley. Publishers. New York.
- 4 1904.Verlag der H.Laupp'schen Buchhandlung, Tübingen. [駒澤大学図書館所蔵]
- 5: Juli 1906
- 6: 18 April 1908
- 7: 15 Nov 1909
- 8: 12 Apr 1911
- 9: Neunte Auflage. [Vorrede] 20 Nov 1913. Tübingen: Verlag der H.Laupp'schen Buchhandlung. [早稲田大学図書館所蔵]
- 10: Zehnte Auflage. Tübingen:Verlag der H. Laupp'schen Buchhandlung.
* Erste Sammlung. 1917. [駒澤大学図書館所蔵]
* Zweite Sammlung. 1918 [早稲田大学図書館所蔵]
- 11: 1919. Tübingen:Verlag der H.Laupp'schen Buchhandlung. [早稲田大学図書館所蔵]
- 12: 1920. Tübingen : Cotta'schen. [早稲田大学図書館所蔵]
- 13 Sechzehnte Auflage, I/II. Tübingen: Verlag der H.Laupp'schen Buchhandlung.1922.
- 13tj 権田保之助『國民經濟の成立』, 大原社會問題研究所.栗田書店,東京,1942.

DAKIN Douglas,

- 1 *Turgot and the Ancien Régime in France*. Methuen & Co.Ltd., London. 1939.

DARJES Joachim Georg,1714-1791.

- 1 *Erste Gruende der Cameral=Wissenschaften darinnen die Haupttheile sowohl der Oeconomie als auch der Policey und besondern Cameral-Wissenschaft in ihrer*

natuerlichen Verknuepfung zum Gebrauch seiner academischen Fuerlesung entworfen. Jena : Johann Adam Melchior Wittwe, 1756. [早稲田大学図書館所蔵]

- 2 Andere und vermehrte Auflage. Leipzig.verlegt diese zwote Auflage Bernhard Christoph Breitkopf und Sohn, 1768,

DEWEY John,1859-1952

- 1 *Individualism, Old and New*. George Allen & Unwin Ltd., London. 1931.

EISENHOWER Dwight D.

- 1 "Liberty is at Stake."
Super State. Readings in the Military-Industrial Complex.
Edited by Herbert I.Schiller and Joseph D. Phillips. University of Illinois Press. USA.1972.

ELLIS Henry,1777-1869.

- 1 *A General Introduction to Domesday Book* ; accompanied by Indexes of the Tenants in chief, and under Tenants, at the Time of the Survey: as well as of the Holders of Lands mentioned in Domesday anterior to the Formation of that Record: with an Abstract of the Population of England at the Close of the Reign of William the Conqueror, so far as the same is actually entered.Illustrated by Numerous Notes and Comments. [1833]
- 2 A Facsimile Reprint.Published by Frederick Muller Ltd. London. 1971.

ENGELS Friedrich, 1820-95.

- 1 "Umrisse zur Kritik der National Oekonomie". *Deutsch-Französische Jahrbücher*. [1844]
- 2 *MEW* (→MARX/ENGELS *Werke*) , Band 1, [1956]/1972.SS.499-524.
- tj1 嘉治隆一「經濟學批判大綱」,同(譯)『獨佛年誌鈔』,同人社書店,1927. 所収
- tj2 平木恭三郎,「國民經濟學批判大綱」,『全集』(→MARX/ENGELS『マルクス エンゲルス 全集』) 第1卷, [1960]/1974
- tel Collected Works, Vol.3, 1975.
- 2 *Die Lage der arbeitenden Klasse in England*. Nach eigener Anschauung und authentischen Quellen, [1845]
- tj1 一條和生/ 杉山忠平『イギリスにおける労働者階級の状態-19世紀のロンドンとマンチェスター』,上・下, 岩波文庫, [1990]/2005
- tj2 浜林正夫『イギリスにおける労働者階級の状態』上・下, <科学的社會主義の古典選書>,

新日本出版社,東京,2000

- 2 Verlag von Otto Wigand,Leipzig.1848.
[初版の再版] [駒澤大学図書館所蔵]
- 3 Zweite durchgesehene Auflage. Verlag von J.H.W.Dietz. Stuttgart. 1892.
- 4 MEW:Bd.2,[1957]/1972,SS.225-506]
- 4te *The Condition of the Working-Class in England in 1844*, Translated by Florence Kelley WISCHNEWETZKY, with Preface written in 1892.
London: George Allen & Unwin Ltd.,[1892]/1920.
- 4tj 岡茂男『イギリスにおける労働者階級の状態 - 著者自身の観察および確実な文献による』, 『全集』, [1960]/1974

FICHTE Johann Gottlieb,1762-1814.

- 1 *Der geschloßne Handelsstaat*. Ein philosophischer Entwurf als Anhang zur Rechtslehre, und Probe einer künftig zu liefernden Politik. [1800]
- 2 Neu herausgegeben von Fritz Medicus. Verlag von Felix Meiner in Leipzig.[1922]/1943.
- 3 Mit einem bisher unbekanntem Manuskript Fichtes "Ueber Staats Wirthschaft". Auf der Grundlage der Ausgabe von Fritz Medicus. Herausgegeben und mit einer Einleitung versehen von Hans Hirsch.
Felix Meiner Verlag, Hamburg,1979.
- tj 出口勇藏『封鎖商業國家論』, 世界古典文庫, 日本評論社,1949.
- 2 *Rechtslehre*. Vorgetragen von Ostern bis Michaelis [1812]/1812./
- 2 Nach der Handschrift herausgegeben von Hans Schulz. Verlag von Felix Meiner in Leipzig.[1920]
- 2r Joh.Gottl.Fichte WERKE. Band VII. Erster Ergänzungsband. Staatsphilosophische Schriften. Verlag von Felix Meiner in Leipzig. (1925)

GEIJSBEEK John Bart.1872-?

- 1 *Ancient Double=Entry Bookkeeping*.
Lucas Pacioli's Treatise (A.D.1494 -- the earliest known writer on book keeping) reproduced and translated with reproductions, notes and abstracts from Manzoni, Pietra, Mainardi, Pmpyn, Stebin and Dafforne. Published by John B.Geijsbeek. Denver, Colorado. 1914. [早稲田大学図書館所蔵]
- r Copyright by BiblioLife, LLC. USA.n.d.[2012]

GIDE, Charles, 1847-1932.

- 1 *Cours d'Economie Politique*. [-2:1911]
- Neuvième Edition. 1925-26. Société anonyme de Recueil Sirey. Paris.

GORGOL John Francis,?-1971?

- 1 *The Military-Industrial Firm*. A Practical Theory and Model. Prepared for Publication by Ira Kleinfeld.
Praeger Publishers. New York. 1972.

GROMOW E, Г Р О М О В Е. А.

- 1 *Воспроизводство Конечного Общественного Продукта США*. Изд. <<Наука>>, Москва. 1966.

HEGEL Wilhelm Friedrich, 1770-1831.

- 1 *Wissenschaft der Logik*. I - II [1812-16]
- 2 [SK], Bd.5/ 6, [1969]/1978
- tj 武市健人『改譯大論理學』, 上・中・下, 岩波書店, [1960]/1978
- 2 *Grundlinien der Philosophie des Rechts*. [1821]
- 2 Mit einem Vorwort von Eduard Gans. [1833]
- 2r *Sämtliche Werke*. Jubiläumsausgabe in zwanzig Bänden. Herausgegeben von Hermann Glockner. Siebenter Band.
Fr. Frommans Verlag Stuttgart, [1928]/1952. (tj2 岩崎武雄の指摘、85ページによる)
- 3 [SK], Bd.7, [1970]/1978.
- te *Hegel's Philosophy of Right*.
Translated with Notes by T.M.Knox.
Oxford University Press, [1952]/1976.
- tj1 高峯一愚『法の哲学』, 上・下, 創元文庫, 1953・54.
- tj2 藤野渉・赤沢正敏「法の哲学」, 岩崎武雄(編集)『ヘーゲル』, 世界の名著44, 中央公論社, 1978
- X [SK] *G.W.F.Hegel. Werke in zwanzig Bänden*.
Aus der Grundlage der Werke von 1832-1845 neu edierte Ausgabe. Redaktion Eva Moldenhauer und Karl Markus Michel.
Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main. 1969-1979.

HILFERDING Rudolf, 1877-1941.

- 1 *Das Finanzkapital*. Eine Studie über die jüngste Entwicklung des Kapitalismus. [1910]
- 2 Marx-Studien. Blätter zur Theorie und Politik des wissenschaftlichen Sozialismus. Herausgegeben von Dr. Max ADLER und Dr. Rudolf HILFERDING. Dritter Band. Wien: Verlag der Wiener Volksbuchhandlung. 1923.
- 3 Mit einem Vorwort von Fred Oelbner.
Dietz Verlag, Berlin. [1947].

- 32.Aufl.,1955.
 -tj 『金融資本論』
 1 林要,改造文庫,1929.
 12 『改訳 金融資本論』,大月書店,1961.
 2 岡崎次郎,『金融資本論』,岩波文庫,1955.
- HILGER Marie-Elisabeth,
 1 "Kapital, Kapitalist, Kapitalismus",
 G-G Bd.3,1982. SS.399-454.
- HOBSON John A,1858-1940
 1 *The Evolution of Modern Capitalism.*—A Study
 of Machine Production.[1894]
 -2 Second edition (reprint of 1st edition) , London:
 Walter Scott, 1901. [駒澤大学図書館所蔵]
 -3 Third edition. 1906
 -4 Fourth edition. 1916
 -5 New and Revised edition. The Walter Scott
 Publishing Co.,Ltd., London ;et al.,[1926]/1927.
 -tj (1926ed) 住谷悦治/阪本勝/松澤兼人『近代
 資本主義發達史論』,改造文庫, 上・下. 1932.
 2 *Imperialism - A Study.* [1902]
 -2 2nd edition. [1905].
 -3 Third entirely revised and reset edition,[1938]
 Fourth Impression.London: George Allen &
 Unwin LTD.1948.
 -4 New Introduction by Philip Siegelman. Ann
 Arbor Paperbooks. The University of
 Michigan Press.1971.
 -tj1 石澤新二『帝國主義論』,改造文庫. 1930.
 -tj2 矢内原忠雄『帝國主義論』,岩波文庫,1951.
 3 *Work and Wealth: A Human Valuation.* New
 York: The Macmillan Company.1914.
 4 *Rationalisation and Unemployment.* An
 Economic Dilemma.
 London.George Allen & Unwin Ltd.,1930.
 5 *Poverty in Plenty.*The Ethics of Income.
 George Allen & Unwin Ltd., London. 1931.
 6 *From Capitalism to Socialism.* Published by
 Leonard and Virginia Woolf. London. (n.d.)
 (1932...早稲田大学図書館による)
 7 *Property and Impropriety.*
 Victor Gollancz Ltd., London. 1937.
- HUME David,1711-1776.
 1 *Political Discourses.*[1752]
 -r Mit einem Kommentar von Sir Alan Peacock,
 Ernst Topisch und Gerhard Streminger.
 <Klassiker>, 1987.
 -2 *DAVID HUME.* Writings on Economics.
 Edited with an Introduction by Eugene
 ROTWEIN,[1955]
 -2r Reprinted 1972 by arrangement with Thomas
 Nelson & Sons Ltd.,
 Books for Libraries Press. Freeport. New
 York.
 -tj 小松茂夫『市民の国について』,上・下, 岩波文
 庫, [1952]/1992
- ISAEV A,И С А Е В Ъ А А,
 1 *Начала Политической Экономии.*[?]
 -2 Издание третье,дополненное.
 С-Петербургъ, Книжный Магазинъ А.Ф
 .Цинзерлинга, 1896.
- JANNET Claude,1844-1894
 1 *Le Capital.* Le Spéculation et la Finance au
 XIXe Siècle.
 Paris:Librairie Plon,E.Plon, Nourrit et C^{ie}.
 Imprimeurs-Editeurs.1892.
- JEVONS,William Stanley,1835-1882.
 1 *Money and the Mechanism of Exchange.*[1875]
 -2 Twenty-fourth edition. Kegan Paul, Trench,
 Trubner & Co., Ltd. London. 1920.
- KAUFMANN Moritz,1839-1920
 1 *SOCIALISM* :Its Nature,Its Dangers,and Its
 Remedies Considered, Founded on the
 German Work "KAPITALISMUS UND
 SOCIALISMUS".By Dr.A.E.F. Henry S. King
 & Co., London. 1874.
 2 *Socialism and Modern Thought.*
 Methuen & Co., London. 1895.
- KAWAKAMI H,河上肇,1877-1946
 1 『經濟學上之根本觀念』,昌平堂川岡書店,
 東京,1905 [国会図書館所蔵]
 -2 3版, 1907.
 2 『經濟學研究』,博文館,東京, 1912
 3 『近世經濟思想史論』, 岩波書店,東京, 1920.
 4 『資本主義經濟學の史的發展』, 弘文堂, 東京,
 [1923]/1924
- KEYNES, John Maynard 1883-1946.
 1 *The Economic Consequences of the Peace.*
 Harcourt, Brace and Howe, New York, 1920.
 Chapter 6,"Europe after the Treaty"[1919]
 2 [Keynes and Ancient Currency][1920-26]
 -2 *JMK*,Vol.XXVIII, Social, Political and Literary
 Writings, 1982
 3 *A Revision of the Treaty.* Being a sequel to
 The Economic Consequences of the Peace.
 Macmillan and Co., Limited. London. 1922.
 4 "Reparations and Interallied Debt." *Essays in
 Liberalism.* Being the Lectures and Papers
 which were delivered at the Liberal Summer

- School at Oxford, 1922.
London. W.Collins Sons & Co. Ltd.1922.
- 5 *A Tract on Monetary Reform.*
Macmillan and Co. Ltd. London. 1923.
- 6 "[The Economic Transition in England.]"[1925]
-2 *JMK*, Vol.XIX. Activities 1922-1929. The
Return to Gold and Industrial Policy. 1981.
- 7 *The End of Laissez-Faire.*[1926]
-2 Second Impression. Published by Leonard &
Virginia Woolf at the Hogarth Press, London.
1926.
- tj 宮崎義一『自由放任の終焉』、『全集』第9巻:「説
得論集」. 東洋経済新報社, 東京, 1981. 所収
- 8 "Liberalism and Industry." *Liberal Points of
View.* With a Foreword by the rt.Hon.D.Lloyd
George, OM.,M.P.Edited by H.L.Nathan, and
H.Heathcote Williams.
London. Ernest Benn Limited. 1927.
- 9 *A Treatise on Money.* In Two Volumes.[1930]
Volume I. The Pure Theory of Money.
Volume II. The Applied Theory of Money.
-American Ed. New York. Harcourt, Brace
and Company.1930.
- 10 [The Lecture under the title of "The World's
Economic Crisis"]
*The World's Economic Crisis and the Way of
Escape.* By Sir Arthur SALTER/Sir Josiah
STAMP/J.Maynard KEYNES / Sir Basil
BLACKETT/ Henry CLAY/ Sir
W.H.BEVERIDGE.
Halley Stewart Lecture,1931. Halley Stewart
Trust. New York. The Century Co. 1932.
[世界経済恐慌とそこから抜け出す方法-ケイン
ズはこのなかの三番目の講義を受け持っている]
-2 *JMK*, Vol.XXI. 1982.
- 11 [National Self-sufficiency][1933]
-2 *JMK*, Vol. XXI. 1982.
- 12 [Mr Keynes replies to Shaw][1934]
-2 *JMK*, Vol.XXVIII. 1982.
- 13 *The General Theory of Employment,Interest
and Money.* London.Macmillan & Co
Ltd,[1936]/1954.
- tj1 塩野谷祐一『雇傭・利子および貨幣の一般理論』
東洋経済新報社,1995
- tj2 間宮陽介『雇傭, 利子および貨幣の一般理論』,
上下,岩波文庫,2008
- 14 "The United States and the Keynes Plan"[1940]
-2 *JMK*: XXII: Activities 1939-45 : Internal War
Finance.
- 15 [The Objective of international price stability]
[1943]
-2 *JMK*, Vol.XXVI. 1980.
- 16 [To George Bernard Shaw, 2.Dec.1934.]
-2 *JMK*, Vol.XXVIII. 1982.
- X *JMK :The Collected Writings of JOHN
MAYNARD KEYNES.* Vols. I-XXX Macmillan.
St. Martin's Press for the Royal Economic
Society.London and Basingstoke.1971-1983.
- tj 『ケインズ全集』, 中山伊知郎/ 塩谷九十九/ 高
橋泰蔵/ 安井琢磨(編集), 東洋経済新報社, 東京
- KNOTT John.
1 *Popular Opposition to the 1834 Poor Law.*
Croom Helm Ltd. Kent.Uk. 1986.
- KOVALEVSKIJ, КОВАЛЕВСКИЙ Максим М.1851-
1916.
1 Экономический Ростъ Европы до Возни
кновения Капиталистического Хозяйст
ва. Томъ I-й.
Москва. Типо-литографія В.Рихтеръ.1898.
- KUCZYNSKI J rgen.1904-
1 *Studien zur Geschichte der Kapitalismus.*
Akademie-Verlag, Berlin, 1957.
- LENIN, ЛЕНИН Владимир И.1870-1924.
1 "По поводу так называемого вопроса
о рынках." [1893]
-2 Ленин О Воспроизводстве и Экономич
еских, Кризисах. Госполитиздат, Москва
.1957.
- tj1 副島種典, 『いわゆる市場問題について』, 新訳
国民文庫.1971.
- 2 Развитие Капитализма въ Россіи. Проц
ессъ образования внутренняго рынка
для крупной промышленности. [1899]
-2 Второе Изд. [1907]
-22 Развитие Капитализма в России. Пере
печатаносо второго, дополненного изд
ания. КооперативноеИздательство "Мос
ковский Рабочий". 1923.
- 3 Империализм, как высшая стадия капи
тализма. (Популярный очеркъ) .[1917]
-2 Госполитиздат, Москва, 1950.
- tj 副島種典, [新訳] 『帝國主義論』, 国民文庫
,[1961]/1967.
- 4 Государство и Революция--учение марк
сизма о государстве и задачи пролет
ариата в революции.[1918]
-2 Госполитиздат, Москва, 1952.
- tj 堀江邑一/平沢三郎 『国家と革命』, 国民文庫
,1961.
- LIEBKNECHT Wilhelm, 1826-1900
1 *Wissen ist Macht--Macht ist Wissen.*
Festrede gehalten zum Stiftungsfest des
Dresdener Bildungs=Vereins am 5. Februar

- 1872,[1872]
 -2 [1888] Ausgabe. 'Vorwort'...im Oktober 1887.
 -3 Neue Auflage. Verlag der Expedition des "Vorwärts"-Berliner Volksblatt. Berlin. 1891.
 2 *Volks-Fremdwörterbuch*. [1874]
 -2 20. Aufl. 1929.
 -2r 高山洋吉『リープクネヒト 外来獨逸語時辭典』刀江書院, 東京, 1963.
- LISSAGARAY Hippolyte-Prosper-Olivaier, 1838-1901.
 1 *Histoire de la Commune de 1871*. Bruxelles. Librairie Contemporaine de Henri Kistemaekers. 1876.
 -2td *Geschichte der Kommune von 1871*. Zweite vom Verfasser durchgesehene Auflage. Illustrierte Ausgabe. Mit einem Nachtrag: Die Vorgeschichte und die inneren Triebkräfte der Kommune. Von Stanislaus MENDELSON. Internationale Bibliothek 10. Stuttgart: Verlag von J.H.W.Dietz. 1894.
 -3 Préfaces: Pour qu'on sache. Mai 1896. E. Dentu, Editeur. [Paris. (?)]
 -4 Nouvelle dition, précédée d'une Notice sur Lissagaray par Amédée DUNOIS. Librairie du Travail. Paris. 1929. [駒澤大学図書館所蔵]
 -4tj 喜安朗／長部重康,『バリ・コミュニケーション』.上・下, 現代思潮社, [1968]/1969.
- LOUVET L.
 1 *Curiosités de l'Economie Politique*. Paris. Adolphe Delahays, Libraire-Editeur. 1861.
- LUMLEY William Golden, 1802-1878.
 1 *A Collection of Statutes of General Use relating to the Relief of the Poor*, with Notes, Abstracts, and a General Index. 2 vols. London: Charles Knight and Co. Vol. I. 1843./ Vol. II. 1852.
- LUXEMBURG Rosa, 1870/71-1919
 1 *Bericht an den III. Internationalen Sozialistischen Arbeiterkongre in Zürich 1893 ber den Stand und Verlauf der sozialdemokratischen Bewegung in Russisch-Polen 1889-1893*.
 -2 *GW*: 1/1
 2 *Die industrielle Entwicklung Polens*. Inaugural-Dissertation zur Erlangung der staats wissenschaftlichen Doktor würde der hohen staatswissenschaftlichen Fakultät der Universität Zürich. [1898]
 -2 *GW*: 1/1
 -tj バーバラ・スキルムント (Barbara SKIRMUNT) / 小林勝『ポーランドの産業的発展』「ローザ・ルクセンブルグ選集」編集委員会編, お茶の水書房, 東京, 2011.
- 3 *Einführung in die Nationalökonomie*, [1907-1914]
 -2 Herausgegeben von Paul LEVI. E.Laub'sche Verlagsbuchhandlung G.m.b.H., Berlin, 1925.
 -3 *GW*: 5,
 -tj1 佐野文夫『経済學入門』, 岩波文庫, 1933.
 -tj2 岡崎次郎／時永 淑『経済学入門』, 岩波文庫, 1978.
- 4 *Die Akkumulation des Kapitals*. Ein Beitrag zur ökonomischen Erklärung des Imperialism us. Verlag: Buchhandlung Vorwärtz Paul Singer. Berlin, 1913.
 -2 1921 Auflage. Franke Verlag G.m.b.H. im Leipzig.
 -3 *GW*: 5
 -tj 長谷部文雄『資本蓄積論』, 青木文庫, [1952]/1966.
- X *Gesammelte Werke*. (*GW*) Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED.
 5 Bde. Dietz Verlag. Berlin. 1970-1975
 Band 1: 1893 bis 1905. 1970.
 Band 2: 1906 bis Juni 1911. 1972.
 Band 3: Juli 1911 bis Juli 1914 [1973]/
 2Aufl. 1978.
 Band 4: August 1914 bis Januar 1919 [1974] / 2Aufl. 1979.
 Band 5: konomische Schriften. 1975.
- MACLEOD Henry Dunning, 1821-1902.
 1 *Elements of Political Economy*. [1858]
 -2 *The Principles of Economical Philosophy*. Being the Second Edition of the "Elements" 2 vols
 Volume I. London: Longmans, Green, Reader, and Dyer. 1872.
 2 *The History of Economics*. G.P.Putnam's Sons. New York. 1896.
- MALLOCK William Hurrell, 1849-1923.
 1 *Classes and Masses or Wealth, Wages, and Welfare in the United Kingdom*. A Handbook of Social Facts for Political Thinkers and Speakers. London: Adam and Charles Black. 1896.
- MALTHUS Thomas Robert, 1766-1834.
 1 *An Essay on the Principle of Population, as it affects the Future Improvement of Society, with Remarks on the Speculation of Mr. Godwin, M. Condorcet, and other*

- Writers.1798. [駒澤大学図書館所蔵]
 -ed1. *First Essay on Population 1798*. With Notes by James Bonar. Reprinted for the Royal Economic Society and Published by Macmillan & Co. Ltd. 1926.
 -tj 高野岩三郎/大内兵衛『初版 人口の原理』,岩波文庫,1935
 -2 *An Essay on the Principle of Population; or, a View of Its Past and Present Effects on Human Happiness; with an Inquiry into our Prospects respecting the Future Removal or Mitigation of the Evils which it occasions*. A New Edition, very much enlarged. Printed for J. Johnson. 1803. [駒澤大学図書館所蔵]
 -3 3d edition: [1807]
 -tj 松本信夫『人口論』,上・中・下 (1/2), 改造文庫, 1937
 2 *Principles of Political Economy*, [1820]
 -rep. Mit einem Kommentar von John M. Keynes, John P. Henderson, Warren J. Samuels und Salim Rashid. [Klassiker] 1989.
 -tj 小林時三郎『経済学原理』, 岩波文庫, 1968, 1969.
- MARSHALL Alfred, 1842-1924.
 1 *Principles of Economics*. Vol. I. London: Macmillan and Co., and New York. 1890. [早稲田大学図書館所蔵]
 -2 An introductory volume. 8th edition, Macmillan and Co., Ltd. LONDON, [1920]
 -2r Reprint, 1930.
 -3 9th edition, with annotations by C. W. Guillebaud, 2 vols, London, [1961]
 -3tj 馬場啓之助『経済学原理』, 東洋経済新報社, 東京, [1965]/1977
- MARX Karl, 1818-1883.
 1 *Zur Kritik der politischen Oekonomie*, Erstes Heft, [1859]
 -2 Herausgegeben von Karl KAUTSKY. Stuttgart: Verlag von J. H. W. Dietz Nachf. (G. m. b. H.) . 1897.
 -22 J. H. W. Dietz Nachfolger, Berlin. 1924.
 -3 *MEW* Bd. 13 [1961]/1971
 -4 Dietz Verlag Berlin, 1972.
 -tj1 杉本俊朗「経済学批判」, 『全集』 13, [1964]/1974
 -tj12 杉本俊朗『経済学批判』, 国民文庫, 1966.
 -tj3 武田隆夫/遠藤湘吉/大内力/加藤俊彦『経済学批判』, 岩波文庫, [1956]/1962
 -tel *A Contribution to the Critique of Political Economy*. Translated from the German by S. W. RYAZANSKAYA, Progress Publishers, Moscow. 1970.
 -tj3 資本論草稿集翻訳委員会『資本論草稿集』(3), 大月書店, 1984
 2 *Resultate des unmittelbaren Produktionsprozesses*. Das Kapital. I. Buch. Der Produktionsprozess des Kapitals. VI. Archiv sozialistischer Literatur 17. Verlag Neue Kritik, Frankfurt, 1969
 -2 Zweite Aufl, 1970.
 -3 Vorbemerkung von Manfred Müller. Dietz Verlag, Berlin, 1988
 -4 *Karl Marx Das Kapital 1.1* Resultate des unmittelbaren Produktionsprozesses. Sechstes Kapitel des ersten Bandes des >>Kapitals<< (Entwurf) . Editorische Bearbeitung und Kommentierung: Rolf Hecker und Hildegard Scheibler. Karl Dietz Verlag Berlin GmbH. 2009.
 -tj1 岡崎次郎『直接的生産過程の諸結果』, 国民文庫, 1970.
 3 *Das Kapital. Kritik der politischen Oekonomie*. Erster Band. Buch I: Der Produktionsprozess des Kapitals. Hamburg. Verlag von Otto Meissner. [1867]
 -1r1 青木書店, 東京, 1959
 -1r2 Urausgabe. Mit einem editorischen Vorwort von Fred E. SCHRADER. Gerstenberg Verlag . Hildesheim. 1980.
 -1r3 [Klassiker], 1988.
 -2 2-te Aufl., [1872]
 -2r1 極東書店, 東京, 1969
 -3 *LE CAPITAL*. Traduction de M. J. ROY, enti rement révisée par l'AUTEUR, [1872]
 -3r1 Reprint, 極東書店, 東京,
 -32 2°, Paris, Librairie du Progrès. 1886.
 -33 *LE CAPITAL*. Livre I, Chronologie et avertissement par Louis ALTHUSSER. Garnier-Flammarion, Paris, 1969.
 -3tj 江夏美千穂/上杉聰彦『フランス語版資本論』, 法政大学出版局, 1979.
 -4 3-te Aufl. [1883]
 -4tel *Capital. A Critical Analysis of Capital Production*. Translated from the third German edition by Samuel MOORE and Edward AVELING. And edited by Frederick ENGELS. 2 Vols. London: Swan Sonnenschein, Lowrey, & Co., 1887. [駒沢大学図書館所蔵]
 -4 tel2 Reprint, Foreign Languages Publishing House, Moscow. [1955]/1960?
 -5 4-te Aufl., Herausgegeben von Friedrich ENGELS. Hamburg. Verlag von Otto Meisner. 1890.
 -52 <VOLKSAUSGABE>: Herausgegeben von Karl KAUTSKY. [1914].
 -522 Vierte, unveränderte Auflage. Stuttgart.

- Verlag von J.H.W.Dietz nachf. G.m.b.H. 1921.
- 52 MEW. Bd.23. [1962]/1973.
- 5te1 Revised and amplified according to the fourth German edition by Ernest UNTERMANN, [Charles H.Kerr & Company, 1906] The Modern Library, Random House, Inc., New York.
- 5te2 *Capital*, (1890 ed) , Introduction by G. D.H.Cole. Translated from the Fourth German Edition by Eden and Cedar Paul. Everyman,[1930]/1934.
- 5tj1 生田長江『資本論』第一分冊, 東京, 緑葉社, 1919. [早稲田大学図書館所蔵]
- 5tj2 松浦要『全譯 資本論 経済學の批評』, (第一・二分冊) 東京, 経済社, 1919. [早稲田大学図書館所蔵]
- 5tj3 高島素之『資本論』第一卷・第一冊, 福田徳三(校注), 『マルクス全集』第1巻, 大鑑閣, 1920. [早稲田大学図書館所蔵]
- 5tj4 河上肇/宮川實『資本論』, 第一巻, 岩波文庫, 1928.
- 5tj5 宮川實『学習版 資本論』, あゆみ出版, 1977.
- 5tj6 長谷部文雄(譯)『資本論』, 青木文庫, 第一部, 1951
- 5tr1 КАПИТАЛ. Критика политической Экономии. Предисл. Ф.ЭНГЕЛЬСА. Пер. И.П.СТЕПАНОВА-С.КВОРЦОВА, [1955] Политиздат, Москва, 1967.
- 5tj7 マルクス=エンゲルス全集刊行委員会, 国民文庫, (1) - (4) , 1961-62.
- 5tj8 マルクス=エンゲルス全集刊行委員会(訳), 大月書店, 第1巻: 1・2.
- 5tj9 岡崎次郎『資本論』第一部 第4版の翻訳, 国民文庫, 1~3, [1972]/1976.
- 5tjA1 向坂逸郎『エンゲルス編 資本論』, 岩波文庫, [1969]/1987.
- 5tjA2 社会科学研究所(監修)/資本論翻訳委員会(訳)『資本論』, 新日本出版社, 東京, 1983.
- 5tjA3 今村仁司/三島憲一/鈴木直『資本論第一巻』, 上・下, マルクス・コレクションIV・V. 筑摩書房, 東京, [2005]/2006.
- 5te3 *CAPITAL* Volume 1, Introduced by Ernest MANDEL, Translated by Ben FOWKES. Perican Books [1976]
- 5te32 Penguin Books in association with New Left Review. London, 1990
- 5tf1 *LE CAPITAL. Critique de l'Economie Politique*. (Quatrieme edition allemande) . Ouvrage publi sous la responsabilite de Jean-Pierre LEFEBVRE. Introduction et notes: Jean-Pierre LEFEBVRE. Messidor/ Editions Sociales, Paris, 1983.
- * *Le CAPITAL de Karl Marx*. Résumé et accompagné d'un Aperçu sur le Socialisme Scientifique par Gabriel Deville. Paris. Librairie Marpon et Flammarion. E. Flammarion, Editeur. (1883?)
- ts Madrid est tip. de Ricardo f. 1887.
- 4 *Das Kapital. Kritik der politischen Oekonomie*. Zweiter Band. Buch II: Der Cirkulationsprozess des Kapitals. Herausgegeben von Friedrich Engels. Verlag von Otto Meisner, Hamburg, [1885]
- 2 Zweite Auflage. 1893.
- 3 MEW Bd.24
- tj1 マルクス=エンゲルス全集刊行委員会, 国民文庫, (5) - (7) , 1962-1963.
- tj2 マルクス=エンゲルス全集刊行委員会, 大月書店, 第2巻: 3.
- 5 *Das Kapital. Kritik der politischen Oekonomie*. Dritter Band. Buch III: Der Gesamtprozess der kapitalistischen Produktion. Herausgegeben von Friedrich Engels. Verlag von Otto Meisner, Hamburg. Erster Theil. Kap I bis XXVIII. 1894/ Zweiter Theil Kap XXIX bis LII. 1894
- 3x MEW Bd.25
- tj1 マルクス=エンゲルス全集刊行委員会, 国民文庫, (8) - (11) , 1963-1964.
- tj2 マルクス=エンゲルス全集刊行委員会, 大月書店, 第3巻: 4・5.
- MARX/ ENGELS
- 1 *Manifest der Kommunistischen Partei*, [1848]
- r1 Originalgetreue Reproduktion der Erstausgabe. Dietz Verlag, Berlin, [1965]/1978
- r2 *Das Kommunistische Manifest von Karl Marx und Friedrich Engels*. Faksimiledruck der Erstausgabe von 1848 mit sechs Vorreden von Marx und Engels sowie Engels' Grundsätze des Kommunismus & . Neu eingeleitet von Hermann Weber. Verlag J.H.W.Dietz Nachf. GmbH. Hannover. 1966.
- 2 MEW, Bd.4, [1959]/1972.
- tj3 塩田庄兵衛『共産党宣言-付 十二か国宣言 六十四か国宣言』, 角川文庫, 1959
- X *MEW: KARL MARX/FRIEDRICH ENGELS WERKE*. Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands, [Die deutsche Ausgabe der Werke von Marx und Engels fußt auf der vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der KPdSU besorgten zweiten russischen Ausgabe.] Bde. I-39/ Ergänzungsbande (1/2) / Verzeichnis (I/II) . Dietz Verlag, Berlin. 1956-1968/1971.

- tj 『マルクス=エンゲルス全集』,大内兵衛/細川嘉六(監訳),全集刊行委員会編,全41巻,補巻4冊,別巻3冊,大月書店,東京,[1959-1977]/1975-77 (『全集』) Klasse für Philosophie, Geschichte, Staats-, Rechts-, und Wirtschaftswissenschaften. Jahrgang 1959 Nr.3. Akademie-Verlag. Berin,[1959]/1960.
- MELMAN Seymour,
1 *Pentagon Capitalism -- The Political Economy of War.* McGraw-Hill Book Company. New York,&c.,1970.
2 *The Permanent War Economy -- American Capitalism in Decline.* Simin and Schuster. New York. 1974.
- MILL James,1773-1836.
1 *Commerce Defended.*[1807?]
-2 *Commerce Defended. An Answer to the Arguments by which Mr.SPENCE, Mr.COBNET, and others, have attempted to prove that COMMERCE is not a Source of National Wealth.* Second Edition. London: Printed for C.and R.Baldwin.1808.
-2tj 岡茂雄『商業擁護論』,未來社,東京,1965.
X *The Collected Works of James Mill.* 7 Volumes. Routredge/ Toemmes Press/ Kinokuniya Co.Ltd.[1992]/2002
- NICHOLLS George,1781-1865
1 *A History of the English Poor Law.* In Consideration with the State of the Country and the Condition of the People.[1860]
-2 New Edition containing the Revisions made by the Author and a Biography by H.G. Wilink. 2 vols. Londn:P.S.King & Son.1898.
* Volume III from 1834 to the present time. Being a Supplementary volume to "A Historyof the English Poor Law" by Sir George Nicholls, K.C.B., Poor Law Commissioner and Secretary to the Poor Law Board. By Thomas MACKAY. London: P.S.King & Son. 1899.
- NOV,Н О В Ъ.
1 Иллюстрированный двухнед?льный В?с тникъ современной жизни, политики, л итературы,науки, искусства и приклад ныхъ знаній Товарищестов М.О.Вольфъ . С.-Петербургъ/ Москва.Томъ VII. 30.де кабря 1885г./ Томъ VIII.15 января 1886г.
- OELSSNER,OELBNER Fred,1903-
1 *Probleme der Krisenforschung.* Sitzungsberichte der deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin.
- OTUKA H,大塚久雄,1907-1996
1 『国民経済』,岩波書店,東京,1980.
- PACIOLI Luca, ca.1445-1517.
1 *Summa de arithmetica,geometria,proportioni et proportionalit.* Venetijis: [Paganino de Paganini],1494.[早大図書館所蔵]
-r1 Tokyo:Yushodo,1989 [駒澤大学図書館所蔵]
-r 部分:『簿記論』原書の第3部;本田耕一『パチヨリ簿記論』(tj) 巻頭部分に初版/ 2版から写真構成
-tel (part) GEIJSBEEK, John Bart.1872-?. *Ancient double-entry book-keeping.*1914.→GEIJESBEEK
-telr Copyright by BiblioLife,LLC. USA.n.d. [2012/07: On Demand.]
-te2 (part) CRIVELLI Pitro: An Original Translation Of the Treatise on Double-Entry Book-Keeping by Frater Lucas PACIOLI. Printed in Italian Black Letter, and Published in Venice in 1494. Translated for the Institute of Book-Keepers Limited,[1924]
-ter Reprinted by Nihon Shoseki, Ltd., Osaka, Japan, 1974.
-td (part) PENDORF Balduin: Abhandlung über die Buchhaltung 1494. Nach dem italianischen Original von 1494 in Deutsche übersetzt und mit einer Einleitung über die Italianische Buchhaltung im 14. und 15.Jahrhundert und Paciols Leben und Werk. C.E.Poeschel Verlag, Stuttgart. 1933.
-tj (part) 本田耕一『パチヨリ簿記論』, 現代書館,東京,1975.
- PASSOW Richard,1880-1949.
1 *"Kapitalismus".* Eine begrifflich-terminologische Studie. Verlag von Gustav Fischer. 1918. [早稲田大学図書館所蔵]
- PEDDIE John Taylor,1879-?
1 *Capitalism is Socialism with Economic Adjustments.* An Industrial System of Political Economy. With a Foreword by Gilbert C.Vyle. Longmans, Green and Co.,Ltd. London. 1926.
- PLEKHANOV,ПЛЕХАНОВ Г.В.1856-1918.
1 Социализм и политическая борьба [1883]

- Избранные Философские Произведения
в пяти томах. том I.
Государственное Издательство Политич
еской Литературы, Москва, 1956.
- PRIDDAT Bilger P.
1 *Hegel als Ökonom.* Duncker & Humblot,
Berlin. 1990.
-tj 『経済学者ヘーゲル』高柳良治/ 滝口清栄/ 早
瀬明/ 神山伸弘 (訳), お茶の水書房, 東京, 1999.
- RAU Karl Heinrich, 1792-1870
1 *Handbuch der National= Wirthschaftslehre,*
von Heinrich Storch, aus dem Franzoesischen,
mit Zusaetzen von D. Karl Heinrich RAU.
3 Bde. Hamburg, bei Perthes und Besser.
1819-20. [早稲田大学図書館所蔵]
-r Nachdrucke zur älteren Wirtschaftslehre; 32.
Dieser unveränderte reprographisches
Nachdruck wurde in einem Laser- Druck-
Verfahren auf säurefreiem und alterungs-best
ändigem Werkdruck-Papier 1998 hergestellt
von Verlag und Antiquariat Gruber,
Dillenburg.
2 *Ueber die Kameralwissenschaft.*
Entwicklung ihres Wesens und ihrer Theile.
Heidelberg, Universitäts=Buchhandlung von
C.F.Winter. 1825.
3 *Lehrbuch der politischen Oekonomie.* [1826-37]
Bd.1. Grundsätze der Volkswirtschaftslehre.
Heidelberg. 1826. [一橋大学メンガー文庫]
Bd.2. Grundzätze des Volkswirtschaftspflege
mit anhaltender Ruecksicht auf
bestehende Staats-einrichtungen.
Heidelberg, Universitaetsbuchhandlung
von C.F.Winter. 1828.
Bd.3 Grundzätze der Finanzwissenschaft.
Abt.1-2, Heidelberg. 1832-37.
[一橋大学メンガー文庫]
-r Mit einer Einleitung herausgegeben von
Bertram SCHEFOLD.
Hildesheim, Olms. 3v in 4. 1997.
- RODBERTUS-JAGETZOW Carl, 1805-1875.
1 *Zur Erklärung und Abhülfe der heutigen
Creditnoth des Grundbesitzes.*
I.II. Jena: Verlag von Friedrich Mauke. 1869.
- ROSCHER Wilhelm, 1817-1894
1 *System der Volkswirtschaft.* Ein Hand= und
Lesebuch für Geschäftsmänner und
Studierende. Stuttgart und Tübingen.
J.G.Cotta'scher Verlag.
* Bd.1: Die Grundlagen der Nationalökonomie.
1854.
-2 2te[1856]/ 3tte[1858]/ 4te[1861]/
5te[1863]
-3 6te, verbesserte Auflage. 1866.
-4 7te[1868]/ 9te[1871]/ 10te[1873]
-5 11te, unveränderte Aufgabe der 10te
Ausgabe, 1874.
-6 15te, unveränderte Abdruck der vorligen
(14te), 1880.
-7 21te, vermehrte und verbesserte Auflage.
Stuttgart: Verlag der J.G.Cotta'schen
Buchhandlung Nachfolger. 1894.
* Bd.2: Nationalökonomik des Ackerbaues
und der verwandten Urproductionen.
[1859]
-2 Zweiter Abdruck, unveränderte
Aufl. 1860.
-3 3tte[1861]/ 4te[1864]/ 5te[1867]/
6te[1870]/ 7te[1873]/
-4 8te, vermehrte Auflage.
Stuttgart, Verlag der J.G.Cotta'schen
Buchhandlung. 1875.
-5 9te [?]
-6 10te, vermehrte Auflage. Stuttgart.
Verlag der J.G.Cotta'schen
Buchhandlung. 1882.
* Bd.3: Nationalökonomik des Handels und
Gewerbfleißes. [1881]
-2 2te Auflage, der ersten unveränderter
Abdruck.
Stuttgart, Verlag der J.G.Cotta'schen
Buchhandlung. 1881.
-3 3te, vermehrte und verbesserte
Auflage.
Stuttgart, Verlag der J.G.Cotta'schen
Buchhandlung. 1882.
-4 6te mit vielen Zusätzen vermehrte
Auflage.
Stuttgart, Verlag der J.G.Cotta'schen
Buchhandlung Nachfolger. 1892.
* Bd.4: System der Finanzwissenschaft. 1886.
-2 4te, vermehrte und verbesserte
Auflage.
Stuttgart, Verlag der J.G.Cotta'schen
Buchhandlung Nachfolger. 1894.
* Bd.5: System der Armenpflege und
Armenpolitik.
Stuttgart, Verlag der J.G.Cotta'schen
Buchhandlung. 1894.
2 *Geschichte der National= Oekonomie in
Deutschland.*
Geschichte der Wissenschaften in
Deutschland. Neuere Zeit, Vierzehnter Band.
Geschichte der Nationalökonomik. Auf

- Veranlassung und mit Unterstützung seiner Majestät des Königs von Bayern MAXIMILIAN II. Herausgegeben durch die histor. Commission bei der königl. Akademie der Wissenschaften. München. R. Oldenbourg. 1874.
- ROSE Michael E.
1 *The English Poor Law 1780-1930*, David & Charles: Newton Abbot, Devon, UK, 1971.
- RUSSELL Bertrand, 1872-1970
1 *Principles of Social Reconstruction*. George Allen & Unwin Ltd., London, [1916]/1920.
- SAKAI T, 堺利彦, 1870-1933.
1 『賣文集』, 丙午出版社, 東京, 1912
2 『唯物史観の立場から』, 三田書房, 東京, 1919
- SAY Jean Baptiste, 1767-1832
1 *Traité d'Economie Politique, ou Simple Exposition de la Manière dont se Forment, se Distribuent, et se Consomment les Richesses*. De l'Imprimerie de Crapelet. A Paris. [1803.]
-r [Klassiker], 1986.
-2 Sixième édition entièrement revue par l'Auteur, et publiée sur les manuscrits qu'il a laissés, par Horace SAY, son fils. Paris, Guillaumin, Libraire, Editeur de Dictionnaire du Commerce et des Marchandises, et de la Collection des Principaux Economistes. 1841. [決定版]
-2tj 増井幸雄『ジャン・バティスト・セイ 経済学』上・下. 東京・岩波書店. 1926/1929.
-3 *Traité d'Economie Politique*. Préface de Georges TAPINOS. Calmann-Lévy. Imprimé en France. 1972.
- SCHAFFLE A, SCHÄFFLE Eberhard Friedrich, 1831-1904.
1 *Das gesellschaftlicher System der menschlichen Wirtschaft*. Ein Lehr- und Handbuch der Nationalökonomie für höhere Unterrichtsanstalten und Gebilde jeden Standes. [1860]
-2 2te, durchaus neu bearbeitete und bedeutend vermehrte Auflage. Verlag der H. Lupp'schen Buchhandlung, Tübingen, 1867
-3 *Das gesellschaftlicher System der menschlichen Wirtschaft*. Ein Lehr- und Handbuch der ganzen politischen Oekonomie einschließlich der Volkswirtschaftspolitik und Staatswirtschaft.[?]
-32 Dritte, durchaus neu bearbeitete Auflage in zwei Bänden. [Bd.1:] Bd.2: Der Organismus der Volkswirtschaft. Verlag der H. Lupp'schen Buchhandlung, Tübingen, 1873.
2 *Kapitalismus und Socialismus mit besonderer Rücksicht auf Geschäfts- und Vermögensfor men*. Vorträge zur Versöhnung der Gegensätze von Lohnarbeit und Kapital. Tübingen: Verlag der H. Laupp'schen Buchhandlung, 1870.
- SCHUMPETER Joseph A, 1883-1950
1 *Das Wesen und Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*. [1908]
-tj 大野忠男/木村健康/安井琢磨『理論経済学の本質と主要内容』, 岩波文庫, 1983.
2 *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*. [1912]
-r [Klassiker], 1988
-2 Zweite, neubearbeitete Auflage. [1926]
-2r 3-tte: *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*. Eine Untersuchung über Unternehmengewinn, Kapital, Kredit, Zins und den Konjunkturzyklus. Unveränderter Ausdruck der zweiten, neubearbeiteten Auflage. München und Leipzig. Verlag von Duncker & Humblot. 1931.
-3 Geleitwort zur vierten Auflage.
4-te Auflage. [1934]
-3r 6-te Auflage. Duncker & Humblot. Berlin. 1964.
-tj 塩野谷祐一/中山伊知郎/東畑精一『経済発展の理論』
-1 上下, 岩波文庫, [1977]/1993
-2 「机上版」岩波書店, 1980
3 "Epochen der Dogmen- und Methodengeschichte". *Grundriss der Sozialökonomik*, I. Abteilung: Wirtschaft und Wirtschaftswissenschaft. Verlag von J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen 1914.
- SECKENDORFF Veit Ludwig von, 1626-1692.
1 *Teutscher Fürsten-Stat*, oder: Gründliche und kurtze Beschreibung welcher gestalt Fürstenthümer, Graff- und Herrschaften im Heiligen Römischen Reich Teutscher Nation, welche Landes-Fürstliche und Hohe obigkeitliche Regalia haben, von Rechts- und

- lößlicher Gewonheit, wegen beschafften zu seyn, Regieret, mit Ordnungen Satzungen, Geheimen und Justitz Cantzeieyen, Consistoriis und anderen hohen und niederen Gerichts-Justan-tien, Aemptern und Diensten verfasst und versehen, auch wie der oselben Cammer-und Hoffsachen bestellt zu werden pflegen. [Frankfurt a.M. 1656.]
- 2 [3tte Aufl: Additiones zum Teutschen Fürstenstat. 1664.]
- r Unveränderter Neudruck der Ausgabe Frankfurt am Main 1665. Mit einem Vorwort von Ludwig Fertig. Verlag Detlev Auvermann KG. Glashütten im Taunus. 1976.
- 3 5-te Aufl. Teutscher Fürsten=Stat. Nun zum fuenfftenmal uebersehen und aufgelegt/Auch mit einer gantz=neuen Zugabe/Sonderbahrer und wichtiger Materien uem ein grosses Theil vermehrer. Mit Churfl. Saechs. special Begnadigung. Frankfl. und Leipzig/ Verlegts Johann Meyer/ Buchhaendler. 1687.
- Summary and an enlarged Index by EDWIN CANNAN. 1904 Methuen & Co. Ltd., London./ G.P. Putnam's Sons. New York.
- 3 Reprinted from the Sixth Edition. With an Introduction by William Robert SCOTT. In two volumes. London. G. Bell and Sons, Ltd., 1925.
- 4 CAMPBELL R.H./ SKINNER A.S./ TODD W.B. (ed) 'GWS', 1976.
- tj1 石川暎作/嵯峨正作『富國論』, 經濟學講習會 . 經濟雜誌社, [明治17年 (1885)]
- tj1r 復刻版, 雄松堂書店, 東京, 1993
- tj21 大内兵衛/松川七郎『諸国民の富』, 岩波文庫 , 1959.
- 2 大内兵衛/松川七郎 (訳) . 岩波書店, 1969.
- tj3 水田洋/ 杉山忠平『国富論』, 岩波文庫, 2000-2001
- X GWS The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith. Commissioned by the University of Glasgow to celebrate the bicentenary of the Wealth of Nations. 6 Volumes and Associated Volumes. Clarendon Press, Oxford, 1976-1983.
- SENIOR Nassau William, 1790-1864.
- 1 *An Outline of the Science of Political Economy*. [1836]
- r Original edition 1939. Reprinted 1965 by arrangement with Allen & Unwin. Augustus M. Kelley, Bookseller. New York, 1965
- 2 *Encyclopadia Metropolitana: System of Universal Knowledge: of a Methodical Plan*. Projected by Samuel Taylor Coleridge. Second Edition, revised. First Division. Pure Sciences. POLITICAL ECONOMY. London: Published by John Joseph Griffin & Co. 1850.
- 2 *Historical and Philosophical Essays*. In Two Volumes. London: Longman, Green, Longman, Roberts, & Green. 1865.
- SODEN Friedrich Julius Heinrich, Grafen von, 1754-1831.
- 1 *Die Nazional=Oekonomie*. Ein philosophischer Versuch, ueber die Quellen des Nazional = Reichthums, und ueber die Mittel zu dessen Befoerderung. 4 Bde. (Insgesamt 9 Bde.) Leipzig, bey Johann Ambrosius Barth.
- * Bd. 1/ 2 1805-6. 2 Bde in 1.
- * Bd. 2-4, 1806-10. 3 Bde. [一橋大学メンガー文庫]
- ** なお1815年のウィーン版 (B.Ph. Bauer発行) ではこのシリーズは 'Lehrbuch der National = Oekonomie.' とされている。タイトル: *Die National=Oekonomie*.
- SOMBART Werner, 1863-1941.
- 1 *Der Moderne Kapitalismus*. Verlag von Duncker & Humblot. Leipzig und München.
- * Bd. 1. Die Genesis des Kapitalismus. 1902.
- * Bd. 2. Die Theorie der kapitalistischen Entwicklung. 1902.
- * Bd. 3. Das Wirtschaftsleben im Zeitalter des Hochkapitalismus.
- * * 1-er Halbbd. Die Grundlagen--Der Aufbau. 1927.
- * * 2-er Halbbd. Der Hergang der hochkapitalistischen Wirtschaft./ Die Gesamtwirtschaft. 1927
- 2 *Die drei Nationalökonomien*. Geschichte und System der Lehre von der Wirtschaft. München und Leipzig. Verlag von Duncker & Humblot. 1930.
- SETH James, 1860-1924.
- 1 *A Study of Ethical Principles*. [1894]
- 2 Sixth edition, revised. New York: Charles Scribner's Sons. 1902.
- SHIGETA S, 重田澄男, 1931-.
- 1 『資本主義の発見--市民社会と初期マルクス』, お茶の水書房, 東京, 1983.
- SMITH Adam, 1723-1790
- 1 *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. [1776]
- r Faksimile-Edition. [Klassiker], 1986.
- 2 Edited, with an Introduction, Notes, Marginal

- tj 小島昌太郎『三つの経済学：経済学の歴史と体系』, 雄風館書房, 東京, 1933

SPIEGEL Henry William.1911-

- 1 *The Growth of Economic Thought*, [1971]
-2 Revised and expanded edition. Duke University Press, Durham, North Carolina. 1983.

STORCH, Шторх Андрей Карлович.1766-1835. Heinrich Friedrich von Storch, Henri.

- 1 *Cours d'Economie Politique*, ou Exposition des Principes qui Déterminent la Prospérité des Nations. Ouvrage qui a servi à l'instruction de Leurs Altesses Imperiales, les grands-ducs Nicolas et Michel. 6v. [St. Petersburg 1815]
-r Mit einer Einleitung herausgegeben von Bertram Scheffold. Olms-Weidmann. Hildesheim. Zürich. New York. 1997.
-td *Handbuch der National=Wirtschaftslehre*. Aus dem Franzoesischen, mit Zusaetzen, von Karl Heinrich Rau. 3 Bde. Hamburg, bei Perthes und Besser. 1819. [早稲田大学図書館所蔵]
-r Nachdrucke zur älteren Wirtschaftslehre; 32. Dieser unveränderte reprographisches Nachdruck wurde in einem Laser-Druck-Verfahren auf säurefreiem und alterungsbeständigem Werkdruck-Papier 1998 hergestellt von Verlag und Antiquariat Gruber Dillenburg.
-2 Avec des Notes Explicatives et Critiques, par J.-B. SAY. 4v. Paris, J.-P. Aillaud; Bossange; Rey et Gravier. 1823. [Tome 1-5.] Paris, J.P. Aillaud - Bossange père - Rey et Gravier, 1823-4. Tome 5: Considérations sur la nature du revenu national. [1824]
-r LaVergne, TN USA.2010.

X Разборъ Отвѣтныхъ Сочиней на Задачу по Части Политической Экономии, Императорскою С.Петербургскою Наукъ въ 1826 году. С.Петербургъ, при Императорской Академии Наукъ. 1829.

THACKERAY William Makepeace.1811-1863.

- 1 *The New Comes*. Memoirs of a Most Respectable Family. Edited by Arthur Pendennis, Esq. 2 Vols. London: Bradbury and Evans, London, 1854/1855. [駒澤大学図書館所蔵]

THEOBALD William.1798-1870.

- 1 *A Practical Treatise on The Poor Laws*, as altered by the Poor Law Amendment Act, and other Recent Statutes containing the Law of Poor Rates, of Relief, Settlement and Removal; and an Appendix, comprising A full Collection of the Statutes, with Notes; and the Forms required by Justices, Guardians, and Parish Officers. London:S.Sweet, Chancery Lane; Stevens & Sons, Bell Yard, Law Booksellers and Publishers. MDCCCXXXVI (1836) .

TURGOT Anne-Robert-Jacques.1727-1781.

- 1 *Réflexions sur la Formation et la Distribution des Richesses*. [1766年に執筆]
-tj 永田清『富に関する省察』岩波文庫, [1934]
-te *Turgot on Progress, Sociology and Economics*. A Philosophical Review of the Successive Advances of the Human Mind/ On Universal History/ Reflections on the Formation and the Distribution of Wealth. Translated, edited and with an Introduction by Ronald L.MEEK. Cambridge at the University Press. 1973.
-2 *Ephemerides du Citoyen*, ou Bibliotheque raisonnée des Sciences Morales et Politiques. Par M.du Pont. 1769 Tome 11-12/ 1770 1.
-2r [Klassiker], 1990.
-3 *Oeuvres de Turgot*. Nouvelle édition. Classée par ordre de matières avec Les Notes de Dupont de Nemours augmentée de lettres inédites, des Questions sur le Commerce, et d'observations et de notes nouvelles par MM.Eugène Daire et Hippolyte Dussard et précédée d'une notice sur la vie et les ouvrages de Turgot par M. Eugène Daire. 《Collection des Principaux Economistes》 Tome 1/2[1844]
-3r Réimpression de l'édition 1844, Osnabrück, Otto Zeller, 1966.

UROEVA, УРОЕВА Анна Васильевна.

- 1 Книга, Живущая Веках. Издательство <<Мысль>>. Москва. 1967.
-2 Второе, дополненное издание.[1972]
-2tj 佐藤金三郎『不滅の資本論』. 大月書店, 東京. 1975.

WAGNER Hans.

- 1 "Die zyklischen überproduktionskrisen der Industrieproduktion in der USA in den ersten beiden Etappen der allgemeinen Krise des Kapitalismus (1914 bis 1958) ".

Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte, 1964 Teil IV -1965 Teil II. Akademie Verlag, Berlin.

WEBER Max,1864-1920

- 1 *Die protestantische Ethik und der "Geist" des Kapitalismus*. [1904-05]
- 2 Sonderdruck aus Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I*. (SSI-206) Verlag von J.C.B.Mohr (Paul Siebeck), Tübingen, 1934.
- tj 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」』
1. 阿部行蔵 (訳), [論集]
2. 梶山力/大塚久雄 (訳), 岩波文庫,1955/1962.
- Xtj 「ウェーバー :宗教・社会論集」(論集)
世界の大思想Ⅱ- 7,河出書房新社

WIESER Friedrich Freiherrn von,1851-1926.

- 1 "Theorie der gesellschaftlichen Wirtschaft"
Grundriss der Sozialökonomik, I.Abteilung: Wirtschaft und Wirtschaftswissenschaft. Verlag von J.C.B.Mohr (Paul Siebeck), Tübingen 1914.
- 2 Zweite Auflage. 1924.
- 2 *Das Gesetz der Macht*. Verlag von Julius Springer. Wien. 1926.
- 3 *Gesammelte Abhandlungen*. Mit einer biographischen Einleitung, herausgegeben von Friedrich A.v. HAYEK. Verlag von J.C.B.Mohr<Paul Siebeck>, Tübingen. 1929.

* DOMESDAY,[DOMESDAY BOOK][1086-7]

- te A Complete Translation. Alecto Historical Editions. Editors: Dr.Ann Williams, Professor G.H.Martin. [1992]
- te-r Penguin Books,[2002]/2003.

* MAGNA CARTA seu Charta de Libertatibus Regis Johannis. Concessus Die Junii Quito Decimo, [A.D.1215]

- r An Original in the British Library, Given to Sir Robert Cotton by Humphrey Wyems in 1629.Cotton MS..Augustus II 106.Published by the British Library,[1976]
- r2 Reprinted in England 1994 by Westerham Press Ltd.
- tj1 田中英夫「マグナ・カルタ」, 高木八尺/末延三次/宮沢俊義 (編)『人権宣言集』,岩波文庫, [1957]/1962
- tj2 MAGNA CARTA Cum translatione Japonica. Auctore Hidenaka TANAKA Kiotoensi in Aedibus Kioto Universitatis Mulierum. MCMLX.

田中秀央『羅和対訳 マグナ・カルタ』,京都女子大学出版部,1960

[この書はマグナ・カルタのラテン語原文の他に日本語・イギリス語・ドイツ語での原文解釈が載せられている]

- x HOLT James Clarke,1922.,
MAGNA CARTA.
Cambridge at the University Press. 1965.
- 2 Second Edition. Cambridge University Press. 1992.
- 2tj 森岡敬一郎『マグナ・カルタ』, 慶應義塾大学出版会, 2000

[叢書]

- * *[Klassiker]: Klassiker der National-Ökonomie. Die handelsblatt-Bibliothek. Eine Faksimile-Edition. Herausgegeben und unter wissenschaftlicher Beratung von Karl-Dieter Gr ske, Herbert Hax, Arnold Heertje und Bertram Schefold. Mitbegr nder von Wolfram Engels, Friedrich August von Hayek und Horst Claus Recktenwald. Verlag Wirtschaft und Finanzen im Schäffer-Poeschel Verlag. D sseldorf.*

[辞典]

CHUDINOV A,ЧУДИНОВЪ А.Н.

- 1 *Словарь Иностранность Словъ вошедш ихъвъ Составъ Русскаго Языка. Материалы для лексической разработки заимствованных словъ въ русской литературной рчи. С.Петербургъ. Издани е Книгопродавца.1894.*

LENSTROEM N,ЛЕНСТРЕМЪ Н.

- 1 *Русско-нѣмецкій и Нѣмецко-русскій Словарь. Russisch-deutsches und deutsch-russisches Wörterbuch [1888-1890]*
- 2 Sondershausen. Verlag von Fr.Aug.Eupel (Otto Kirchhoff) . Leipzig: G.E.Schulze. I. Russisch-deutscher Theil [1888]/3-tte 1891 II. Deutsch-russischer Theil 1890.

LIEBKNECHT Wilhelm,1826-1900

- 1 *Volks- Fremdwörterbuch*. [1874]
- 2 20. Aufl. 1929.
- 2r 高山洋吉『リープクネヒト 外来獨逸語時辭典』刀江書院, 東京, 1963.

OED: *The Oxford English Dictionary*.

- 2 Second Edition on Compact Disc, Oxford University Press, 1994.

OLD: *Oxford Latin Dictionary*. Edited by P.G.W.GLARE,[1982]

-2 Oxford: At the Clarendon Press,1994

PINLOCHE A.

- 1 *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*, comprenant un Vocabulaire des noms propres at un Abrégé grammatical.[?]
- 2 Troisième édition, revue et corrigée. Librairie Larousse, Paris. 1930.

G-G: *Geschichtliche Grundbegriffe*:

Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland.

Herausgegeben von Otto Brunner / Werner Conze / Reinhart Koselleck.

Ernest Klett Verlag Stuttgart, 8 Bde. 1972-1997

[資料]

Congress of the United States.

Defense Spending and the Economy.

February 1983.

Joint Economic Committee

Federal Expenditure Policy for Economic Growth and Stability. Nov.5,1957. Washington, 1957.

US Department of Commerce. Bureau of the Census

- 1 *Census of Manufactures*, (1963-1972)
- 2 *Shipments of Defense-Oriented Industries*. Current Industrial Reports. MA-175, 各年版
- 3 *Manufacturers' Shipments, Inventories, and Orders*: 1961-1968/ 1966-1971. Series M3-1

『朝日新聞』,朝刊,2012/5/18.「イスラム市民を攻撃 可能」

[後記]

この論文を作成するに当たって、一橋大学図書館・早稲田大学図書館・駒澤大学図書館に「資料」の点で大変お世話になりました。また経済学部「論集編集委員」の皆さんにはご迷惑をおかけしました。ここにやっと「論稿」ができあがりました。

[2012.12/14-2013.01/31 成稿]
